

祖堂集卷第十六

江西下卷第三曹溪第三代法孫

南泉和尚、馬大師に嗣ぐ、池州に在り。師諱は普願、姓は王、新鄭の人なり。母の之を孕みし時、輦血を喜こまず。至徳二年密縣大隗山の太慧禪師に投じて受業せり。後大寂に参じて密に靈符を掌す。池陽宣城の廉使陸亘らんらんことを請つて礼事し、大いに真教を弘む。

師上堂する毎に云く、近日禪師太多生なるも、一個の癡鈍底を見むるに得可からず。阿你諸人錯つて用心すること莫れ。此の事を躰せんと欲すれば、直に須く佛未だ出世せざる已前、都て一切の名字無く、密用潜かに通じて人の覚知する無き、与魔の時に向かつて躰得して方めて小分の相應有るべし。所以に道う、祖佛は有ることを知らざるも狸奴白牯却つて有ることを知ると。何を以て此くの如きや。他かれは却つて如許多般の情量無ければなり。所以に喚んで如如と作さば早す是でに變まぜり。直に須く異類中おに向いて行ずべし。只だ五祖大師の如きは下に五百九十九人有りて盡く佛法を會す。唯ただた盧行者あんじやのみ有りて一人佛法を會せず。他かれは只だ道を會するのみ。直に諸佛出世來たるに至るも、只だ人をして道を會せしむるのみにて別事を為さず。

江西和尚の即心即佛と説くは且く是れ一時の間語のみ。是れ外に向かつて馳求するの病を止む。空拳黄葉にして啼くことを止むるの詞なり。所以に言つ、不是心、不是佛、不是物と。如今多く人有りて心を喚んで佛と作なし、智を認めて道と為し、見聞覚知するは皆云う是れ佛と。若し是くの如ければ演若達多頭を將て頭を見む。設たと使とい認得するも亦た是れ汝が本来佛ならず。

若し即心即佛と言わば、兔馬に角有るが如し。若し非心非佛と言わば、牛羊に角無きが如し。你かれが心若し是れ佛ならば、他に即するを用いず。你かれが心若し是れ佛ならざれば、亦た他を非とするを用いず。有無の相形如何んぞ是れ道ならん。所以に若し心なりと認むれば、決定して是れ佛ならず。若し智なりと認むれば、決定して是れ道ならず。

大道は影無し、真理は對無し。空に等しく動かずして、生死の流に非ず。三世攝せずして、去來今に非ず。故に明暗自ら去來して、

虚空は動揺せず。万象自ら去来して、明鏡何ぞ曾つて鑿せん。

阿你今時盡く説く、我れは修行して佛と作ると。且く作摩生か修行せん。但し無量劫来不變異の性を識取せば是れ眞の修行なり。人有り拈じて問う、三世諸佛は什摩と為てか有ることを知らざる。師云く、争でか你の喃喃たるを肯わん。進んで曰く、狸奴白牯は什摩と為てか却つて有ることを知る。師云く、他に似なば即ち會せん。

師は上堂することに云つた、近ごろ禪師が多すぎる。一個癡鈍底を求めると見つからない。みんな勘違いしてはならんぞ。此の事を体得しようというのなら、佛も未だ世に出でない以前、あらゆる名称文字もまるで無い、ひそかな作用がひそかに作用して知るものとしていない、そういう時に於いて体得せねばならない。そうしてこそ始めて小分の相應があるのだ。だから祖佛は有ることをしらないのに狸奴白牯は有ることを知っていると云うのだ。どうしてかと云えば、狸奴白牯にはそこばくの情量がないからだ。だから如如と云つてもすでに変化している。どうしても異類中に於いてやって行かねばならない。

あの五祖大師だが、その下には五百九十九人の者がいて、すべて佛法がわかつていた。ただ盧行者のみは一人佛法がわからず、道がわかつているばかりであった。結局諸佛が出世されてもただ人に道をわからせようとするだけで、別事をなすのではない。

江西和尚は心こそが佛であると説いておられるが、あれはその時だけのむだ口だ。外に向かつてあくせく求める病気をなおそうというのだ。空拳や黄葉のように泣くのをやめさせようとする言葉だ。だから心でもなく、佛でもなく、衆生でもない、と云うのだ。今多くの人が心を佛だと云い、智が道であると思ひ、見聞覚知するものが佛だと皆な云う。しかしこういふ風だと、演若達多が自分の頭で自分の頭を探し求めるようなもので、たとえ見たと思つても汝の本来佛じゃない。

心が佛であると云つたなら、兎や馬に角をつけるようなものだ。もし心でもなく佛でもないと云つたなら、牛や羊の角をとるようなものだ。みんなの心が佛であるならば、それに即する必要もない。みんなの心が佛でないのであるならば、それを非とする必要もない。有や無の相あるものが、どうして道であるうか。だから、心だと認識されるものは決して佛ではない。智だと認識されるものは決して道ではない。

大道には落ちる影がない。真理には対立するものがない。虚空のように不動であって、生死にわたるものではない。三世におさまらず過去でも未来でも現在でもない。だから明暗が勝手に去来しているだけで虚空は動かないし、万象が勝手に去来しているだけで明鏡は映そうとするわけではないのである。

みんなが今日わたしは修行して佛となるのだと云うが、ならばどう修行するのだ。無量劫来変異しない本性を見てとったならば、眞の修行である。

ある人が拈じて問う、三世諸佛はなぜ有ることを知らないのですか。師が云う、お前さんにぶつぶつ云ってもらいとうはない。進んで云う、狸奴白牯はどうして有ることを知っているのですか。師が云う、それみたいになつたらわかる。

・知有 入矢義高「龐居士語録」一 八頁参照。

師又たの時に衆に謂いて曰く、會するときは即便ち会し去る。会せざるときは即ち王老師の罪過なり。

師はまたある時大衆に云った、わかればそのままわかってしまつんだ。わからないのは王老師の罪過だ。

・王老師罪過 景德伝灯録に「師入宣州、陸大夫出迎接、指城門云、人人盡喚作麤門、未審和尚喚作什麼門。師云、老僧若道、恐辱大夫風化。陸云、忽然賊来時作摩生。師云、王老師罪過」(巻八、台湾本一三五頁)や、祖堂集巻十六にも用例が出る(四一一九頁)

師初め庵に住せし時、一僧の到る有り。師、僧に向かつて云く、某甲は山に入り去らん。一餉時にして某の為に茶鉢を送り来たれ。其の僧應諾す。其の僧、師の去るを待ち、後に家具を打破し、火を殺却して長伸瞌睡す。師、小時にして帰り、僧の睡するを見る。師は他の身辺に向かつて伴睡す。其の僧便ち起きて発し去る。師は後に住すること数年を得て、衆に謂いて曰く、我れ初め庵に住せし時、个の靈利の僧有り、如今は却つて見ず。

師がむかし草庵に住んだ頃、一人の僧がやって来た。師はその僧に云った、わしはこれから山に行く、しばらくしたらわしに茶と飯をとどけてくれ。その僧は承知した。その僧は師が立ち去るのを待って、家具を打ちこわし火を消してしまつと、からだを伸ばして眠った。師はしばらくして帰って僧が眠っているのを見ると、かれのかたわらに眠った。その僧はすぐさま起きあがって行つてしまった。師は住持となつて数年のちのこと、大衆に云つた、わしがむかし草庵に住んだころは、こんなかしこい(目から鼻に抜けるような)僧がいたのに、いまではお目に掛かれない。

・大衆を目の前にしながら、草庵当初、がむしゃらな程真つ向から挑戦して来たこの僧を、南泉はむしろ懐かしんでいるよつである。

師、僧に問う、空劫中に還た人の修行すること有りや。对えて云く、有り。師云く、是れ阿誰ぞ。对えて曰く、良欽。師云く、何の国土にか居する。僧無对。曹山代わつて云く、若し与摩ならば、是れ良欽ならず。報慈代わつて云く、若し与摩ならば則ち自ら出で来つて相い訪ねよ。長沙代わつて云く、常寂光土に居す。

師が僧に問う、空劫の真ただ中で、人が修行することがあるか。对えて云う、有ります。師が云う、それは誰だ。对えて云う、良欽です。師が云う、どんな国土に居るのか。僧は無对。曹山が代わつて云う、もしそついうことでしたら(何国土に居るかということでしたら)それは良欽ではありません。報慈が代わつて云う、もしそついうことでしたら(和尙南泉)自身でおでましになつて訪ねて下さい。長沙が代わつて云う、常寂光土に居ります。

・若与摩 曹山の場合は、空劫中に何らかの国土を措定しようとした南泉の過を取り払っているよつであり、報慈の場合には、南泉の措定をそっくり承当したうえでの代語のよつで、両者の与摩の間には違いがあるよつに思われる。いずれにしても、問答は常に、当事者が空劫や修行をどのよつにびつと受け止めているかが問われている。

師は時有つて云く、我れ行脚せし時、一个の老宿有つて某甲に教えて、返本還源と道つ。噫、禍事なり。我十八の上、解く活計を作し、三乘十二分教は我れに因つて有する所、如今、我れ三乘十二分教に向かつて、且らく是とせず。所以に解く修行する底の人は因果に落ちず、解く修行せざる底の人は他の因果に落つ。

師はある時云つた、わしが行脚していた頃、一人の老宿がわしに教えて返本還源と云つた。ああ、危ういところであつた。わしは十八歳のころ僧として独り立ちし、そのときから三乘十二分教を自分のものとして把むことができた。しかし、いまは三乘十二分教に対して、必ずしも肯定はしない。だから修行できる人は因果に落ちないが、修行のできない人は因果に落ちてしまふ。

・返本還源 南泉語要に「上堂云、諸子、老僧十八上、解作活計。有解作活計者出来、共你商量、是住山人始得。良久顧視大衆、合掌曰、珍重無事、各自修行。大衆不去。師曰、如聖果大可畏、勿量大人、尚奈何。我且不是渠、渠且不是我、渠爭奈我何。他經論家說法身為極則、喚作理尽三昧、義尽三昧。似老僧向前被人教返本還源去、幾恁摩會。禍事」とある。聖果や極則が本とし源として前提されているところを禍事と呼んでいる。なお引用のところは、祖堂集卷

十六(第四冊)二二三頁末行以下の問答を参照。

・三乘十二分教 ここでは三乘十二分教の究極の内容を返本還源としているのであろう。なお、南泉語要には「十二分教、決定不是我。我即向十二分教中行履得。若十二分教是我、即受変也」とある。三乘十二分教をおのれとして捉えた場合に本来の自分ではないものにされてしまふ。

・解修行底人 南泉語要に「如和尚每言、修行須解始得。若不解即落他因果、無自由分。未審如何修行、即免落他因果。師曰、更不要商量。若論修行、何処不去得。曰、如何去得。師曰、你不可逐背尋得」とあり、また他にも「一念異、即難為修行。曰、云何一念異、難為修行。師曰、纔一念異、便有勝劣二根、不是情見、隨他因果、更有什麼自由分。」とか、「菩提涅槃皆修行人境界、皆屬明句。若會本來非是物、即水不能洗水。何以故。本來無物故」といつて、南泉には特に修行について述べる所が多い。きわめて緊張を含んだ意味に用いられ、わずかな前提や固定化が落他因果

(不自由)となり、変、受変となることを強調しているようである。

陸巨大夫問う、弟子、六合従り来たる、彼中に還^はた専甲の身有りや。師云く、分明に記取し、已後、作家に拳似せよ。

陸巨大夫が問う、弟子は六合(江寧府)よりまいりました。あそこにもわたくしの身体がありませんか。師が云う、よく覚えておいて、あとで作家に言いなさい。

・作家 練達した禅匠。

・専甲 某甲と同じ。

千頃寺の院主到る。師問う、汝の和尚が在りし日の如許多の債負、什摩の人をして還さしむるや。院主無對。師代わつて云く、和尚をして一時に還却せしむ。道吾代わつて云く、把り將ち来たれ。石霜代わつて云く、他に人天無し、什摩の債負とか懺^のしらん。

千頃寺の院主がやって来た。師が問う、おまえさんの和尚がまだ存命のころのそこばくの負債はどなたに返済させるのかね。院主は無對。師が代わつて云う、和尚(南泉)にすぐさま返済させてしまいます。道吾が代わつて云う、そいつを持って来なさい。石霜が代わつて云う、かれはもはやこの世にはいません。どんな負債だといってかれをのしるうとこの世です。

・千頃寺 宋高僧伝卷十一に「天目山千頃院明覚伝」を出す(八三三年没)。

師順世せんと欲せし時、第一座に向かつて云く、百年の後、第一、王老师の頭上に向かつて汚することを得ざれ。第一座對えて云く、終に敢えて造次にせざらん。師云く、或いは人有つて問わん、王老师什摩の處に去りしやと。作摩生か他に向かつて道わん。對えて云く、本處に歸り去れりと。師云く、早是に我が頭上に向かつて汚し了れり。却つて問う、和尚百年の後、什摩の處に向かつてか去る。師云く、山下の壇越家に向かつて一頭の水牯牛と作り去る。第一座云く、某甲も和尚に随い去らん。還た許すや。師云く、你

若し我に随わんとならば、一莖草を銜み来たれ。

師は順世しようとした時、第一座に向かつて云った、わしの死後、このわしの頭の上を汚物だけがしては決してならんぞ。第一座が答えて云う、決してめつそうなことはいたしません。師が云う、もしかしてある人が問うかも知れん、王老师はどこに行ったのだと。どう彼に答えてやるか。答えて云う、もとのところにお歸りになったと答えます。師が云う、そもつわしの頭の上をけがしおった。僧の方から問う、和尚さん亡くなられたあと、どこに行かれるのですか。師が云う、山下の檀越の家で水牯牛になりに行く。第一座が云う、わたしも和尚さんについて行こうと思います。許されるでしょうか。師が云う、お前さん、もしわしについて来るのなら、わら一本くわえておいで。

・臨濟録「師臨遷化時、據坐云、吾滅後、不得滅却吾正法眼藏。三聖出云、爭敢滅却和尚正法眼藏。師云、已後有人問你、向他道什麼。三聖便喝。師云、誰知吾正法眼藏、向這瞎驢邊滅却。言訖端然示寂」。

・向山下檀越家作一頭水牯牛去。師がこう云った意については本伝冒頭の師の上堂の語を参照。なお瀉山の伝に「師臨遷化時、示衆曰、老僧死後去山下作一頭水牯牛、脇上書西行字云瀉山僧。某某甲与摩時、喚作水牯牛、喚作瀉山僧某甲。若喚作瀉山僧、又是一頭水牯牛。若喚作水牯牛、又是瀉山僧某甲。汝諸人作摩生。後有人拳似雲居。雲居云、師無異号。曹山代云、喚作水牯牛」とある。また九峯和尚の伝に「問、古人道、向山下檀越家作一頭水牯牛。与狸奴白牯還分也無^云」という問がある。

・銜一莖草来。法華經譬喻品、「若作駝、或生驢中、身常負重、加諸杖捶、但念水草、餘無所知。謗斯經故、獲罪如是」とあるのを踏まえる。

僧逍遥に問つ、如何なるか是一頭の水牯牛。逍遥云く、一身に両役無し。進んで曰く、如何なるか是一莖草を銜み来る。逍遥云く、新舊添え得ず。僧云く、還た學人の承當するを許すや。逍遥云く、你若し承當せんとならば、鐵を銜み鞍を負え。

僧が逍遙に問う、一頭の水牯牛とはどんなものでしょうか。逍遙が云う、一身に両役無し。進んで云う、一莖草とはどんなものでしょうか。逍遙が云う、新舊添え得ず。僧が云う、わたくしが体験することが許されましょうか。逍遙が云う、お前さんも体験しようというのなら、くつわを銜み、鞍を負いなさい。

・逍遙 馬祖の法嗣(伝灯録八)と夾山の法嗣(祖堂集九、伝灯録十六)とにこの名が見える。

・一身無両役 南泉という一つの身に、人としての役と牛としての役と二つあるわけではない。

・新舊添不得 新しい草くさという概念も旧い草という概念も一莖草には加えられないところから、南泉という一つの身に牛という領域と人という領域があるわけではない。直前の話とともににはなはだ難解であるが、一頭、一莖の一といつところをとらえてなされた答のようである。あたかも前の則の注に引いた蕩山の場合に、雲居が云った「師無異言」と通ずるものがある。ちなみに蕩山の場合、伝灯録では「古人頌云、不道蕩山不道牛、一身両號實難酬。離却両頭應須道、如何道得出常流」という割注がついている。

又た僧、曹山に問う、只だ水牯牛の如きは今の什摩邊の事を成じ得るや。曹山云く、只だ是れ水を飲み草を喫する底の漢のみ。僧云く、此は便ち是れ沙門邊の事なること莫きや。曹山云く、此は是れ沙門あんり行李の處にして是れ沙門邊の事ならず。僧云く、如何なるか是れ沙門邊の事。曹山云く、祖佛有ることを見ず。進んで曰く、如何なるか是れ沙門行李の處。曹山云く、常に塵中に在り。

また僧が曹山に問う、この水牯牛ですが、何辺の事を成立させるのですか。曹山が云う、ただただ水を飲み、わらを喫する底の漢だ。僧が云う、これがすなわち沙門邊の事なのですね。曹山が云う、これは沙門行李のところであって、沙門邊の事ではない。僧が云う、沙門邊の事とはどういうものですか。曹山が云う、祖佛のあることを見ない。進んで云う、沙門行李のところとはどういうものですか。曹山が云う、常に塵中に在る。

・飲水喫草底漢 やはり法華経譬喩品の語を踏まえる。

・沙門邊事 沙門の理念的な在り方。

・行李處 脚跟下の事。具体的な日常一切の當為。二一一—二八頁參照。

・塵中 九峯の伝にいう、「問、一切處覓不得、豈不是聖。師云、是聖也。牛頭未見四祖、豈不是聖。師云、是也。聖境未亡。僧曰、二聖去多少。師云、塵中雖有隱形術、争似全身入帝鄉」とあるのを參照。沙門邊を帝郷になぞらえることができるのであろう。

又た問う、如何なるか是れ沙門の相。曹山云く、眼を盡くして看るも見えず。僧云く、還た被搭するや。曹山云く、若し被搭すれば則ち是れ沙門の相ならず。如何なるか是れ沙門行李の處。曹山云く、頭に角を戴き、身上に毛を被す。僧云く、此の人什摩人の力を得たるや。曹山云く、終日他が力を得て只だ是れ行きて住まらず。僧云く、此の人何を以てか貴しと為す。曹山云く、頭上角を戴かず、身上毛を被せず。

また問う、沙門の相とはどのようなものですか。曹山が云う、いくら目をこらしても見えない。僧が云う、(袈裟などを)着ますか。曹山が云う、若し着たならば沙門の相ではない。問う、沙門行李のところはどのようなものですか。曹山が云う、頭に角をいただき、身は毛でおおわれている。僧が云う、この人は誰のおかげをこつむっているのですか。曹山が云う、終日それのおかげをこつむって、ゆいてやまない。僧が云う、この人は何を貴しとしているのですか。曹山が云う、頭に角をいただかず、身が毛でおおわれていないことだ。

・卷八曹山の伝にこれとそっくり同じの問答が出ている(二一—四三頁)。

又た問う、沙門行と行李の處とは是れ一か是れ二か。曹山云く、亦た一にして亦た二なり。如何なるか是れ一。曹山云く、殺仏殺祖。如何なるか是れ二。曹山云く、被毛戴角。

・五家語録の曹山のところ、「雲門問、如何是沙門行。師云、喫常住苗稼者是。雲門云、便恁麼去時如何。師云、你還畜得麼。雲門云、畜得。師云、你作麼生畜。雲門云、著衣喫飯、有甚麼難。師云、何不道被毛戴角。雲門便禮拜」とある

のを参照。また招慶の伝巻十三、四一四頁(参照。沙門行はso二二行李処はso三三なり。

又た問う、凡より聖に入ることは則ち問わず。聖より凡に入る時如何ん。曹山云く、个の頭の牯牛を成じ得。如何なるか是れ水牯牛。曹山云く、蒙蒙腫腫地。僧云く、此の意如何ん。曹山云く、但だ水草を念じて餘に知る所無し。僧云く、个の何邊の事を成じ得るや。曹山云く、只だ是れ水に逢つては水を喫し、草に逢つては草を喫す。

また問う、凡夫の世界から聖賢の世界に入るとは問いません。聖賢の世界から凡夫の世界に入るとどうなりますか。曹山が云う、一頭の水牯牛になる。僧が云う、水牯牛はどのようなのですか。曹山が云う、ボサボサアアだ。僧が云う、それはどういう意味ですか。曹山が云う、ひたすら水とわらを思つてほかに知るところがない。僧が云う、どのような境界を成り立たせるのですか。曹山が云う、ひたすら水に逢つては水を喫し、わらに逢つてはわらを喫するばかり。

・卷十三福先招慶の伝に「問、南泉道三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有。只如三世諸佛、為什摩不知有。師云、只為慈悲利物。僧云、狸奴白牯為什摩却知有。師云、唯思水草、別也無求。僧云、未審南泉還知有也無。師云、知幻則離」とあるのを参照。

又た問う、如何なるか是れ一頭の水牯牛。曹山云く、聖果を證せず。如何なるか是れ一莖草を銜み來たる。曹山云く、毛羽と相い似たり。

また問う、水牯牛とはどのようなものですか。曹山が云う、聖果を證しない。わら一本をくわえて來るとはどういうことですか。曹山が云う、鳥のようだ。

師又たの時に毬子を拈起して僧に問う、那个は這个に何似ぞや。對えて云く、似ならず。師云く、你は什摩の處に那个を見て、便ち似ならずと道えるや。對えて云く、若し某甲が見處に約せば、和尚も亦た須く手中の物を放下すべし。師云く、你に一隻眼を具すること許す。洞山代わつて云く、若し見なば則ち他に似去らん。

師はまたほかの時にまりをとり上げて僧に問うた、あれはこれとどうだ。答えて云う、どうということはありません。師が云う、お前さんどこにあれを見てどうということはないといふのだ。答えて云う、わたくしの見るところでは和尚さんも手中の物を置くべきです。師が云う、うむ、一隻眼そなえておるわい。洞山が代わって云う、もし見たならばそれとどうということが成立することになるでしょう。

・ 毬子 禅毬。禅林家器箋参照。

・ 洞山代云 僧が手中の物を置いたらお相手になりましようと言った語に代わったもの。

師行脚する次いで村路を問う、此の路什摩の處にか到る。村公對えて云く、脚下底是れ什摩ぞ。師云く、岳に到るや。村公云く、原無云字、如許多の時又覓む。師云く、茶有りや。對えて云く、有り。師云く、一椀の茶を覓めん、得たりや。對えて云く、覓むることは則ち得ず。但だ來れ。

師は行脚しているおり、村の路をたずねた、この路はどこに行きますか。村公が答えて云う、足もとは何ですか。師が云う、お山に行きますか。村公が云う、永いこと求めておられるんですね。師が云う、お茶がありますか。答えて云う、あります。師が云う、一杯求めたい、よろしいか。答えて云う、求めてはいけません。ただいらっしやい。

・ 疲れ果ててわやにされた師を想像する。

・ 又覓在 句末の在は強辭。

師衆に示して曰く、王老師身を売らんと要す。阿誰か買わん。僧對えて云く、某甲買わんと要す。師云く、他は賤しと作さず、亦た貴しと作さず。你は作摩生か買わん。僧無對。安國代わって云く、与摩ならば則ち專甲に囑し去りしなり。

・ 与摩則囑專甲去也 そういふことならわたくしに委託したことになります。

問う、師は丈室に帰り、何を將つて指南するや。師云く、昨夜三更牛を失却し、天明火を失却す。作摩生か是れ牛を失却する。師云く、未だ問わざる已前に會取せよ。作摩生か是れ火を失却する。師云く、但だ人に就いて覓取することを知るのみ。

問う、師は丈室に歸られて何を指南されますか。師が云う、昨夜三更には牛がいなくなった。天明には火事を出してしまつた。牛がいなくなつたとはどういうことですか。師が云う、問わない前に見てとりなさい。火事を出してしまつたというのはどういうことですか。師が云う、人に求めることを知つてただけだ。

・昨夜三更失却牛、天明失却火 すつからかんの状態。

問う、祖祖相傳す。合た何法を傳うるや。師云く、一二三四五。

師、陸巨太夫に問う、十二時中作摩生。對えて云く、寸絲も掛けず。師云く、什摩を作すにか堪えん。夫云く、什摩の處に過有りや。師云く、還た聞道や、有道の君は有智の臣を納れずと。

・陸巨太夫 卷十六に傳あり。

・還聞道 還不聞道とあつてほしいところ。

・有道之君不納有智之臣 このわしはそのような小ざかしい言葉は受け入れん。

問う、牛頭、未だ四祖に見えず、百鳥花を銜んで供養せし時如何。師云く、只だ歩歩佛塔を踏むが為めなり。見えし後、什摩と為てか来たらざる。師云く、直饒来たらざるも、猶お王老师に一線道を較す。

問う、牛頭が未だ四祖におめにかからないとき、百鳥が花をくわえて供養しましたがどうですか。師が云う、一步一步仏塔を踏

んでいたからだ。おめにかかったあとでは、どうして百鳥は来なかったのですか。師が云う、たとえ来なくても、このわしとは一すじちがう。

・百鳥銜花 伝灯録四の牛頭伝にみえる記事。

・猶較王老師一線道在 南泉の確信の一語。祖堂集卷十四杉山四一四九頁に「雲門闍拳似云、南泉只是步步登高、不解空裏放下」とある。句末の在は強い断定の語氣を表わす。

師、帰宗と同行すること二十年、行脚して茶を煎る次いで、師問う、従前に記持する商量の語句、已に此を離るることを知れり。後に人有つて畢竟の事を問わば作摩生。帰宗云く、這の一片の田地、今の庵を卓^たつるに好し。師云く、庵を卓つることは則ち且らく置け、畢竟の事、作摩生。帰宗、茶銚を把つて去る。師云く、某甲は未だ茶を喫せず。帰宗云く、這今の語話を作^なす、滴水も也た消し得ず。

師は帰宗と二十年間伴にした。行脚して茶を煎れたとき、師が問うた、これまでに記憶した商量の語句は、今はすでにそれを棄てることができた。このち誰かが畢竟の事を問うたらどうしよう。帰宗が云う、この一片の田地は庵を立てるのにもってこのところだ。師が云う、庵を立てることはさて置いて、畢竟の事はどうなのだ。帰宗は茶びんをもって行ってしまふ。師が云う、わしはまだ茶を飲んでいないぞ。帰宗が云う、こんな話をするようでは、一滴の水も飲む資格はない。

・二十年帰宗と同行して、茶を煎れたこのときに、南泉には何か一つの区切りになるものが心にあつたのであるう。

・這一片田地^云 帰宗なりの従前記持商量の語句を離れたところ。

・滴水也消不得 祖堂集卷十三招慶章に「若有一物所憑、滴水也難消」。また伝心法要に「汝千日学慧、不如一日学道。若不学道、滴水難消。」とある。

人有つて問う、和尚は、此間すかんに住し来たつて、作家を見るや。師云く、作家は則ち見ず。两个の石牛闘いて海に入り、直に如今に至るまで廻ることを得ず。人有つて拈じて龍花に問う、只だ南泉の与摩に道うが如きは、意作摩生。龍花云く、誰か敢えて這裏に向かつて出頭せん。

ある人が問う、和尚はここに住持されていてらい、ひとかどの人物に会われましたか。師が云う、ひとかどの人物には会わぬ。二頭の石牛が格闘して海中に入ったまま、いまに至るまで戻つてこない。別の人がこのことを龍花に問うた、南泉がそう云つたことの意はどつてでしょうか。龍花が云う、誰れもそこに頭を出せない。

・两个石牛云 祖堂集卷六洞山章に「師曰、見两个泥牛闘入海、直至如今無消息」とあり、洞山録にも同様の句がある。
・直至如今廻不得 南泉自身の闘いの真剣さ、徹底したところ。「誰敢向這裏出頭」の語からも推しはかることができる。

師、錫杖を持って韶州に到る。勅史問う、十二種の頭陀、和尚は是れ第幾種ぞ。師乃ち振錫すること一下。勅史再問す。師云く、大鈍生。

師が錫杖を持って韶州にやつて来た。勅史が問う、十二種の頭陀のうち、和尚は第何番目ですか。師はそこで錫杖をひとふりする。勅史は再び同じ質問をする。師が云う、ひどくにぶいやつだ。

師繩床を敲き衆に謂いて云く、大衆、他かれと語話せよ。対えて云く、却つて請う、和尚他と語話せよ。師云く、我は他と語話せず。僧云く、什摩と為してか他と語話せざる。師云く、他と語話するを辞せざるも、恐らくは他は解よく語らじ。

師は繩床を敲いて皆に云われた、大衆よ、かれと話をしなさい。対えていう、どうぞ和尚さんこそかれと話をして下さい。師が云う、わしはかれとは話をしない。僧が云う、どうしてかれと話をしないのですか。師が云う、かれと話をしない訳ではないが、恐らくかれは喋れまい。

師又の時に曰く、若是もし文殊普賢ならば、昨夜三更に各おの二十棒を打ち、院を越い出し了れり。趙州対えて云く、和尚は合さに多少の棒を喫すべきや。師云く、王老師什摩の罪過か有る。趙州礼拝して出で去る。

師はあるとき云われた、文殊や普賢のことなら昨晚三更に各々二十棒をくらわせて院から越い出してしまった。趙州が対えて云う、和尚は棒をいくつくらわれるべきですか。師が云う、わしにどんな罪過が有るのか。趙州は礼拝して出で行った。

師、趙州に謂いて云く、江西の馬大師道つ、即心即佛と。老僧が這裏は則ち与摩に道わず。不是心、不是仏、不是物、与摩に道つ、還はた過有りや。趙州礼拝して出で去る。

師が趙州に云う、江西の馬大師は即心即仏と言つ。わしのところではそうは言わない。不是心、不是仏、不是物、とこのように云う。過ちがあるか。趙州は礼拝して出で行った。

・不是心不是仏不是物 冒頭の上堂參照。

趙州樓上に在りて水を打す。師、下従り過ぐ。趙州手を以て欄を攀じ、脚を懸けて云く、乞つ師、相い救え。師、道を踏み上りて云く、一一三四五。趙州云く、師が指示を謝す。

趙州が井戸のやぐらの上で水を汲んでいたとき、師が下を通りかかった。趙州は欄に手をかけ、脚をぶらぶらさせて云った、どうか師よ助けて下さい。師はしごを一段々上りながら云う、一、二、三、四、五。趙州云う、師のご指示に感謝いたします。

・趙州録に「師在南泉井樓上打水次、見南泉過、便抱柱懸脚云、相救相救。南泉上糊梯云、一一三四五。師少時間却去礼謝云、適来謝和尚相救」とある。

南泉山下に僧有つて住庵す。人有つて他かれに向かつて道すかんう。此間に南泉有り、近日世に出づ。何ぞ彼中かしくに住いて礼拝し去らざる。庵僧云く、任你たどい千聖現るるも、我は終に疑い得ず。僧有つて師に拳似す。師は趙州をして他かれを看しむ。趙州は庵に到り、便ち礼拝し起ち来つて、東辺従り西辺に過ぎて立ち、西辺従り東辺に過ぎて立つ。此の僧は惣に動ぜず。趙州又た破廉を抜く。其の僧亦た動ぜず。趙州歸つて師に拳似す。師云く、我れ從來、他を疑えり。

南泉の山下にある僧が草庵を結んで住した。ある人がかれに云う、ここには南泉和尚があらわれ、このごろ世に知られているのに、どうしてそこに行つて礼拝しないのだ。庵僧が云う、たとえ千聖が目の前に現れようと、わしは決してぐらつかない。別のある僧が師にこのことを話した。師は趙州に庵僧をたずねさせた。趙州は草庵に来るとすぐに礼拝してたち上り、東側から西側へと横切つて立ち、また西側から東側へと横切つて立つた。この僧は身動きしんどう一つしない。趙州はそこで破廉をひっこ抜く。其の僧はやはり身動がない。趙州は歸つて師にこの話をした。師が云う、わしは以前からあいつはただものではないと思つていた。

・任你千聖現云 寒山詩に「任你千聖現、我有天真仏」とあり、また臨濟録には「…乾坤倒覆、我更不疑。十方諸仏現前、無一念心喜」とある。

師、黄檗に問う、笠子太小生。黄檗云く、小なりと雖も、三千大千世界、惣に裏許うらごに在り。師云く、王老师你。黄檗無对。後に人有つて長慶に拳似す。長慶代わつて云く、敵あなを欺あなる者は亡なす。保福代わつて云く、泊ぼくど和尚わうが此間すかんに到らざらんとす。

師が黄檗に問う、笠かさが小さすぎるな。師が云う、小さいといつても、三千大千世界はすべてこの中にありますぞ。師が云う、わしはどうだね。黄檗は無对。のちにある人が長慶にこの話をした。長慶が代わつて云う、敵をあなどる者は亡びる。保福が代わつて云う、すんでに和尚さんのところには到りつけぬところだった。

・笠子太小生 黄檗は「身長七尺額有肉珠」の大男であつた祖堂集卷十六(四一―三三頁)、伝灯録卷九台湾本一五三頁。
・王老师你 你是「訶」「叱」「呢」に同じ。詰問の語の余声。お前さんの三千大千世界の範圍にわしははいるかな。

・黄檗無对 伝灯録巻九では「師便戴笠子而去」とある。

人有つて問うて曰く、三身中、阿那个かもつとも尊し。師云く、三隻の投子、擲下して一個を失却す。

ある人が問う、三身中でどれが最も尊いでしょうか。師が云う、三個のさいころを投げて、一個を失くしてしまった。

・さいころ遊びのさいころは三個でワンセットになっている。

僧有つて問う、古人道う、摩尼珠人識らず、如来蔵裏に親しく收得す、と。如何なるか是れ如来蔵。師云く、王老师、你と与摩に
来去する是れ蔵なり。進んで曰く、不来不去の時は如何。師云く、亦た是れ蔵なり。如何なるか是れ珠。師、僧を喚ぶ。僧應諾す。師
云く、去れ、你じ會せず。

ある僧が問う、古人は摩尼珠人識らず、如来蔵のうちに自から收得しているといっています。どういのが如来蔵でしょうか。
師が云う、わしがお前とこうして来去やりとりしているのが蔵だ。さらに云う、不来不去のときはどうでしょうか。師が云う、それも蔵だ。
どういのが珠でしょうか。師はその僧の名を呼ぶ。僧は返事をする。師が云う、行ってしまえ、お前は判っていない。

・古人道云 永嘉玄覺の証道歌の一節。

・与摩来去是蔵 二字ずつを「如」「来」「蔵」に当てている。

人有り帰宗に到る。帰宗問う、什摩いずれの處よりか来る。對えて云く、南泉より来る。帰宗云く、什摩の佛法の因縁有りや。對えて云
く、和尚上堂して衆に告げて曰く、夫れ沙門は須く畜生行を行ぜずべし。若し畜生を行ぜずんば是の處ところ有ること無しと。帰宗沉吟底。僧
便ち問う、只だ南泉の如きは意如何ん。帰宗云く、畜生行と雖然いえども畜生の報を受けず。其の僧は却歸して師に拳似す。師云く、實に
与摩に道えるや。僧云く、實なり。師云く、孟八郎又た与摩にし去る。

ある人が帰宗にやって来る。帰宗がたずねる、どこからやって来た。對えて云う、南泉からやって参りました。帰宗が云う、どのような仏法の因縁があつたか。對えて云う、和尚は上堂して人々に告げました、およそ沙門は畜生行を行じなければいかん、もし畜生行を行じないならだめだ、と。帰宗は考え込む。僧がたずねる、南泉はどういうつもりですか。帰宗が云う、畜生行を行しても畜生の報を受けない。その僧は歸つて師に話す。師が云う、確かにその様に言つたか。僧が云う、確かに。師が云う、いい加減な奴め、またそんなことを言つたのか。

・孟八郎 「孟」とは孟浪でたらめな(の)意。「八郎」というのは年齢の順序をいうものであるが、特定の人をさすのではない。ろくでなし。

趙州問う、有ることを知る底の人は什摩いすれの處に向かつてか休歇し去る。師云く、山下に向かつて一頭の水牯牛なと作り去る。趙州云く、和尚の指示を謝す。

趙州が問う、有ることを知っている人は、どこでやすらぎを得るのですか。師が云う、山の下で一頭の水牯牛になる。趙州が云う、和尚のご指示、ありがとうございます。

・知有底人 趙州録には「師問南泉、知有底人、向什摩處去。泉云、山前檀越家作一頭水牯牛去。師云、謝和尚指示」。なお冒頭の上堂参照。

問う、如何なるか是れ菩薩の意旨。師云く、黒きこと漆の如し。僧云く、眼は何處にか在る。師云く、明るきこと日の如し。

僧、辞する時問う、学人山下に到り、人有り、和尚近日如何んと問著せば、作摩生か祇對せん。師云く、但だ他かれに向かつて解よく相撲すと道え。僧云く、作摩生か相撲せん。師答えて云く、一拍雙泯。

・一拍雙泯 不詳。恐らく相撲の取り口を説明する語であろう。

問う、父母未だ生ぜざる時、鼻孔は何摩の處にか在る。云く、如今已に生ぜり、鼻孔は何摩の處にか在る。瀉山別して云く、則今阿那个か是れ鼻孔なる。

・別云 南泉の答に対して瀉山が別語を述べている。別語の用例の中、恐らく最初の例であろう。

僧有り師の身边に在りて叉手して立つ。師云く、太俗生。僧又た合掌す。師云く、太僧生。僧無對。

問う、十二時中、何を以て境と為すや。師云く、何ぞ王老师に問わざる。僧云く、問了れり。師云く、還^はた曾て你が与に境と為れるや。

師は院主を見て遂に喚ぶ。院主便ち近前し叉手して立つ。師云く、佛は九十日初利天に在りて母の為に説法す。優填王は佛を思う。故に目連をして神通三たび轉せしめ、匠人を攝して彼に往かしめ、彫りて三十一相を得るに、唯だ梵音相彫り得ざる有るのみ。院主便ち問う、如何なるか是れ梵音相。師云く、人を賺殺す。

師は院主を見かけて喚ぶ。院主はすぐさま前にやってきて叉手して立つ。師が云う、佛は九十日の間初利天で母のために説法された。優填王は佛を思うあまり、目連に神通力を三たび發揮させ、匠人を初利天に行かせて佛の三十一相を彫ることができたが、梵音相だけは彫れなかった。院主がそこで問う、どのようなが梵音相ですか。師が云う、詐欺師め。

・優填王思佛 増一阿含經卷二十八に佛は三月の間初利天に昇り母の為に説法し閻浮に還らず。時に優填王牛頭梅檀を以て如来の形像を造るといふ(大正七 六a)。目連云々の記事は不載。

・梵音相 仏三十二相の中、梵音深遠相をいう。梵は清浄の義、佛の音声は清浄にして遠く聞こえることをいう。

僧、雀兒の生を啄むを見て師に問う、什摩と為てか与摩に忙しきことを得るや。師便ち鞋を脱いで地を打つこと一下す。僧云く、和尚地を打ちて什摩をか作す。師云く、雀兒を趣えり。

・打地作什摩 地面をたたいて何になる。

・趣雀兒 僧を雀に見立てて云う。

師、院主に問う、忽し人有りて王老師、什摩の處にか去ると問わば、你是作摩生か道わん。院主無對。曹山代わつて云く、但だ作摩と道うのみ。疎山代わつて云く、去處有るを待つて則ち和尚に道わん。

師が院主に問つた、もしある人が王老師はどこに行かれたかとたずねたら、お前はどう答えるか。院主は答えない。曹山が代わつて云う、ただ作摩と言つだけです。疎山が代わつて云う、行き場所がきまつたら和尚に答えましょう。

問う、如何なるか是れ涅槃。師云く、清きこと猶お清く、急なること猶お急なり。浮沙何處にか停らん。僧拈じて問う、如何なるか是れ清きこと猶お清き。師云く、他を混か混すること一點もし得ず。如何なるか是れ急なること猶お急なる。師云く、目を轉じて看るも見えず。如何なるか浮沙何處にか停る。師云く、金屑は貴しと雖も眼裏に著し得ず。

問う、どの様なのが涅槃ですか。師が云う、(流れが)清いことはいよいよ清く、速いことはいよいよ速い。浮き砂などどこにも停り様がない。僧がとりあげて問う、清きことはいよいよ清いとはどういふことでしょうか。師が云う、一点ですらにこし得ない。速いことはいよいよ速いとはどういふことでしょうか。師が云う、目を動かして見ても見えない。浮き砂などどこにも停り様がないとはどういふことでしょうか。師が云う、金屑は貴重だとしても、眼の中には入れられぬ。

・金屑雖貴 臨濟録「侍云、金屑雖貴、落眼成翳、又作摩生。師云、將為你是箇俗漢」。祖堂集卷七雪峯の章第二冊一
二頁に「師拳、古來老宿引俗官巡堂云、這裏有二三師僧、尽是學佛法僧。官云、古人道、金屑雖貴、又作摩生。無對
云」という語を引く。

師、黄蘗に問う、定慧等しく学して、明らかに佛性を見る、此の理如何。黄蘗云く、一物に依らず。師云く、便ち是れ長老が家風なること無きや。蘗云く、不敢。師云く、漿水錢は則ち且らく置く、草鞋錢は阿誰をしてか還さしめん。

師が黄蘗にたずねた、禅定と智慧を等しく学することによって明らかに仏性を見る、というこの道理はどういうことか。黄蘗が云う、何ものにも依存せぬことだ。師が云う、つまりこれがあなたの家風ですな。黄蘗が云う、どついたしまして。師が云う、飲み物代はともかくとして、わらし代は誰にかえさせるのだ。

・定慧等学 壇經「我此法門、以定慧為本。大衆、勿迷言定慧別。定慧一体、不是二。……即是定慧等学」。涅槃經二十
八「諸佛世尊定慧等故、明見仏性、了了無礙」。(大12―79―c)

師又た問う、長老は什摩しずれの年中にか受戒せる。蘗云く、威音王佛と、時を同じうして受戒せり。師云く、威音王佛は是れ我が児孫なり。黄蘗却つて問う、和尚は什摩の年中にか受戒せる。師云く、この後生礼莫し。黄蘗無對。

師又た問う、白銀を地と為し、黄金を壁と為す。此れは是れ什摩人の居止の処なりや。蘗云く、聖人の居止の処なり。師曰く、更に一人有り、什摩の処に居すや。蘗云く、我れは則ち道い得ず。師云く、王老師却つて道い得。蘗云く、便ち道うを請う。師云く、王老師が罪過。

師がまたたずねた、金銀で造られた邸宅は誰が住まう処なのか。黄蘗が云う、聖人が住む処です。師曰く、もう一人居るがどこ

に住まうのか。黄檗が云う、私には云えません。師が云う、わしなら云い得る。黄檗が云う、それなら云つて下さい。師が云う、わしが悪かった申し訳ない。

師、帰宗と共に行く次いで、帰宗先行し師落後す。忽ち大蟲の草裏より出するを見る。師は怕れて敢えて行かず、便ち帰宗を喚ぶ。帰宗転じ来たつて一喝す。大蟲便ち草に入る。師問う、師兄大蟲を見るに今の什摩にか似たる。帰宗云く、猫原作苗兎に相似せり。師云く、王老师と猶お一線道を較す。帰宗却つて問う、師弟大蟲を見るに今の什摩にか似たる。師云く、大蟲に相似せり。

師が帰宗と一緒に歩いていっていると、帰宗が先に行き、師がおくれた。突然虎が草むらから出て来たのを見て、師は恐れて進もうとせず、帰宗を呼んだ。帰宗がもどつて来て一喝したところ、虎は草むらに入った。師がたずねた、師兄は虎を見たが、何に似ていたか。帰宗が云う、猫にそっくりだった。師が云う、わしとは糸ひとすじちがう。帰宗が問うた、師弟は虎を見たが、何に似ていたか。師が云う、虎にそっくりだった。

道吾南泉に到る。師問つて曰く、閻梨名は何摩ぞ。道吾对えて云く、円智。師云く、智の到らざる処、作摩生か道わん。道吾对えて云く、切に説著するを忌む。師曰く、灼然たり、説著すれば則ち頭角生すること。却後三五日の間にして、道吾は雲岳と相い共に僧堂前に在りて針を把る。師は行遊の次いで、道吾を見、依然として問う、智閻梨は前日道う、智の到らざる処、切に説著するを忌む、説著すれば則ち頭角生ず、と。如今合に作摩生か行李すべき。道吾は便ち身を抽して起ち、却つて僧堂内に入り、師の過ぐるを待ちて、後却つて出で来たれり。雲岳道吾に問う、和尚の適来問ひしに何ぞ祇对せざる。道吾云く、師兄は与摩に靈利なるを得たり。雲岳は却つて和尚の処に上りて問う、適来、和尚の智師弟に問える、この因縁は、合に作摩生か祇对すべき。師云く、他は却つて是れ異類中に行ぜり。雲岳云く、作摩生か是れ異類中の事。師云く、豈に道うを見ずや、智の到らざる処切に説著するを忌む、説著すれば則ち頭角生ず。喚んで如如と作すも早く是れ変ぜり。直に須く異類中に向かつて行ずべし、と。雲岳亦た先随ならず。

道吾は念言すらく他は薬山と因縁有りと。便ち却つて他と共に薬山に去く。薬山の問う、闇梨は何れの処に到り来たるや。岳云く、此の廻は南泉に去き到り来たり。薬山云く、南泉は近日什摩の方便有りて学徒に示誨するや。雲岳は前話を拳似す。薬山云く、汝は還た他のこの時節を会するや。雲岳云く、某甲は他の彼中に在りと雖も、只だ是れ他のこの時節を會せざるが為に(下有是字)、便ち特に归来す。薬山大咲す。雲岳便ち問う、作摩生か是れ異類中に行ずる。薬山云く、我れ今日困せり、汝は且らく去りて別時に来たれ。岳云く、某甲は特に此の事の為に归来せり。乞う、和尚慈悲せよ。薬山云く、闇梨は且らく去れ、老僧は今日身体痛し、別時に却来せよ。雲岳は礼拝し了りて便ち出で去る。道吾は方丈外に在りて立ちて他の領覽せざるを聴聞し、舌を咬みて血を得たるを覚知せず。却後に去きて問う、師兄は和尚の処に去きて因縁を問うに、和尚は今の什摩をか道いし。岳云く、和尚は並びに某甲の為に説かず。道吾は時に當つて低頭し、声を作さず。在後、各おの別処に在りて住す。遷化に臨むに至りし時、洞山と密師伯の来たるを見る。道吾は師伯に向いて説けり、雲岳は這の一則の事有るを知らず。我は当初、薬山に在りし時、他に向かつて説かざりしを悔ゆ。此の如しといえども雲岳は(薬山の子に違せずと。道吾は却つて師伯の為に子細に此の事を説けり。

師、僧に問う、什摩の處にか去く。對えて云く、山下に去く。師云く、第一に王老僧を謾ることを得ざれ。對えて云く、終に敢えて和尚を謾らず。師遂に瓶を將つて水を噴して云く、是れ多少ぞ。僧無對。師代わつて云く、師の本有に非ず。又た云く、和尚の境界に非ず。保福代わつて云く、和尚は他の一斗米を置つて、半年の糧を失却す。

師が僧に問う、どこへ行くのか。對えて云う、山下へまいります。師が云う、絶対に王老僧をコケにしなければならんぞ。對えて云う、決してコケにしたりなんぞしません。師はそこで瓶の水を口にくみプツと噴き出して云う、どれくらいだ。僧は無對。師が代わつて云う、師がもともともつておられたものではありません。また云う、和尚さんの境界ではありません。保福が代わつて云う、和尚さんは、目先きの一斗米を手に入れようとして、半年の糧をすっかり失った。

・ 山下去、「百年後、向山下檀越家、作一頭水牯牛」を踏まえている。

・第一不得謾云 口先だけのものまねでわしをばかにするな。

・非師本有 南泉の、つまり山下の水牯牛の本有とは曹山の語を借りれば「但念水草餘無所知」(卷十六一一二)「只是飲水喫草底漢」(同一一一)ということで、噴水の分量はあくまで方便でしかない。しかし、南泉の対応は、本有のストリートな露呈ではなくて、きわめて親切な非本有からの方便であるように思われる。

・崑他一斗米失却半年糧 雲門広録には「……直是今生未得、来生亦不失人身、向此門中亦乃省力、不虛辜負平生、亦不辜負施主師長父母。直須在意、莫空過時。遊州獵縣、橫擔拄杖、一千里二千里走、這邊終冬、那邊過夏、好山好水、堪取性、多齋供易得衣鉢。苦屈苦屈。圖他一斗米、失却半年糧。如此行脚有什摩利益。信心檀越一把菜一粒米、作麼生消得。直須自看、無人替代、時不待人云」とある。この用例からみると、保福の代語はやはり南泉の応対ぶりが非本有であったことを鋭く突いている。と同時に、それだけ南泉の親切さをほめているようでもある。

師、黄蘗に問う、什摩いずれの麈ゆにか去く。對えて云く、菜を擇いびに去く。師云く、什摩を將もつてか擇いぶ。黄蘗、刀子を豎起す。師云く、只だ解よく客と作るなのみにして、解よく主と作らず。自から代わつて云く、更に覓みむれば則ち得ず。

僧有あつて拈てじて長慶に問う、古人のために主と作らんには、如何が道わん。長慶便ち之を咄つす。僧拈てじて順徳に問う、南泉、黄蘗を見し什摩の麈にか去くの意旨如何ん。順徳云く、也た是れ黄蘗の招致し得たり。僧云く、只如たえば、黄蘗、後に与摩よに南泉に襍ま對たいせしは、還はた得たりや。徳云く、且らく自から付せば則ち得たり。僧云く、只如たば南泉に對えて作摩生か道わん。徳云く、汝、南泉に作り来たれ。僧云く、什摩を將もつてか擇いぶ。徳、刀を放下す。

師が黄蘗に問う、どこへ行くのか。對えて云う、菜つ葉をえり取りに行きます。師が云う、何をもつてえらぶのか。黄蘗は包丁をつつたてる。師が云う、お前さんは客とすることができただけで、主となることはできてない。(南泉は)自から代わつて云う、さらにもとめたらだめだ。

ある僧が長慶にこのことを取りあげて問う、古人黄檗に代わって主となるには、どのように云えばよいのでしょうか。長慶はすぐさまその僧を叱りつけた。また別の(ある僧が順徳にこの話を取り上げて問う、南泉が黄檗をみかけてどこに行くのかといったのは、どんなつもりだったのでしょうか。順徳が云う、むしろ黄檗の方がさそい出したのでもある。その僧が云う、その黄檗があとであるように南泉に應對したのは、あれでよろしいのでしょうか。順徳が云う、まあ自分で付与すればよろしい。その僧が云うでは最後は(南泉に答えて)どのようにいいますか。順徳が云う、お前さんひとつ南泉和尚となつて(らん)。その僧が云う、なにをもつて扱ぶのか。順徳は包丁を置いた。

・擇菜去 問答の情況は、龐居士と松山の場合と同じ。青葉と黄葉をよりわけ(選択、分別)ことが両者に予め諒解されている(龐居士語録参照)。むしろ、両者は龐居士の一件を前提にしていると考えてもよい。南泉はどこへ行くと尋ねる。黄檗の答は当然ながら龐居士のいう「不落黄青」(不落分別)を完結していなければならぬ。扱ぶという分別を前面に押し出しながら、実は分別に落ちない主体が確立されたことを提示している。

・將什摩擇 南泉は正面切つて出された「扱菜」の主体をかわして、「扱菜」の手段へ問題を変えながら、側面から黄檗の確信を鋭く突いている。

・豎起刀子 見事に南泉にイニシアチブを取られた格好。ここには最早「擇菜去」といった黄檗の主体性は影も形もない。
・只解作客、不解作主 分別に落ちない主体となり得ておらず、ただ手段の刀子(客)がキラキラしているばかり。問答の主客も顛倒してしまっている。

・更覓則不得 もし黄檗の確信が完結しているのなら、真に主であり得たのなら、「將什摩擇」という南泉の設問を、全くはねとばす一句(「更覓則不得」)であるべきはず、ということ。

・長慶咄之、徳放下刀は、ともに「主」の提示である。入矢『龐居士語録』一一三頁以下参照。

師一日有りて法堂上に坐し、忽然として喝すること一聲せり。侍者驚訝す。和尚の處に上りて看るに、並びに人無し。大師曰く、汝、涅槃堂裏に去きて、一僧の死すること有りやを看よ。侍者半路に到る。涅槃堂主の納衣を著して、走上り來たるに逢見す。侍者云く、和尚は、某甲をして涅槃堂裏に一人の死せること有りやを看しむ。堂主對えて云く、適來、一僧の遷化せし有り。特に來たつて和尚に報ぜんすとす。兩人共に去きて、和尚に向かつて説く。停騰の間、更に一人有り、來つて和尚に報じて云く、適來遷化せし僧却來せり。和尚其の僧に問う、病僧什摩をか道う。其の僧云く、和尚に見えんことを要む。師便ち涅槃堂裏に下りて病僧に問う、適來、什摩處にか去き來たる。病僧云く、冥中に去き來たる。師曰く、作摩生。僧云く、百里の地を行き得て、脚手癢痛し、行き得ず。又た水に渴く。忽然として玉女有つて喚びて大樓台閣上に入らしむ。某甲行き乏れて辛苦し、樓閣に上らんと欲得ず。始めて上る次いで、傍らに一個の老和尚有り、某甲を喝して上ることを許さず。纔かに喝聲を聞くや則便ち驚訝し、身を抽いて仰倒す。今日再び和尚に見ゆることを得たり。師喝嘖して云く、好樓閣と謂う可けんや。若し老僧に遇わざれば、泊んど火客屋裏に入りて猪と造らんとす。此れ従り後ち、其の僧修福して利益を作し、日夜停めず。直に手指三分にして、只だ一分有る底に到る。年七十に到りし後坐化して去る。呼んで南泉道者と為す。

師はある日法堂で坐禅していたが、突然大声で一声となりつけた。侍者は驚いて和尚のところに行つてみると他に誰もいない。大師が云う、お前、涅槃堂にいつて、一人の僧が死んでいないかどうかみてきてくれ。侍者は路半ばまで來て、涅槃堂主が衣を着けてかけあがつて來るのに出会つた。侍者が云う、和尚がわたしに涅槃堂に一人の僧がなくなつたかどうかを看て來いといわれた。堂主が對えて云う、今しがた一人の僧が遷化したばかりなので、その為によつて來て和尚さんに知らせようとしてるところです。二人は共に和尚のところに来てその事を話していると、その折りも折り、もう一人の僧が來て和尚に告げて云う、たつたいま、遷化した僧がもどつて來ました(息をふき返しました)。和尚はその僧にたずねる、その病僧は何と云つてゐるのか。その僧が云う、和尚さんに会いたがつております。師はすぐさま涅槃堂に下つて行つて病僧に問う、いましがた、どこへ行つていたのか。病僧が云う、冥土へ行つておりました。師が云う、それでどうだつた。僧が云う、百里ばかり行くと手足が痛くて進むことができず、また

ノドがからからです。と突然、見目も麗しいお方が私を呼びとめ、大楼阁上に招き入れます。私といえば歩きつかれてくたくただったものですから、(招きに応じて)楼阁に登ろうと思いました。登りはじめたとき、一人の老和尚が私の傍らにいて、私をどなりつけて登ることを許しません。私はそのどなり声を聞いたとたんびっくりして、身をひいてひっくりかえりました。そして今また和尚さんにお目に掛かることができず、何が立派な楼阁なものか。もし老僧と遇わなかったら、すんでのところで奴僕小屋の(償債)猪豚になるところだったぞ。これよりのちその僧は、(償債のために)修福し利益を為して日夜休むこともなく、とつとつ手の指は三つに分かれて、しかもただ一つだけになってしまった。年七十になって坐化して逝去した。人呼んで南泉道者といふ。

・祖堂集卷十六黄檗の項に同趣旨のエピソードがある。祖堂集卷十四馬祖章の大安寺主の話や無門関第二則の百丈野狐も同じ神異譚の一つ。

・涅槃堂 病僧を送って入滅させる処。

・火客屋裏造猪 火客屋は奴僕に近い小作人の労役の場。造猪は、前生の負債を還すために畜生に転生し労役して返済するという「償債の畜生」(牛・馬・驢・犬・猪などの)「償債猪」のことであろう。先例としては法苑珠林第五十七債負篇のうち感應緣略引十一驗(に出る中国の話)に、「随冀州人耿伏生」と「唐潞州人李校尉」の二話は、「作猪償債」譚である。(大正蔵第五十三卷一七二aとc)。また、澤田瑞穂「佛教と中国文学」の指摘によれば、他に清の陳其元、庸閑齋筆記卷八償債猪があるといわれる(同書二二二頁五、釈教劇録、(一)龐居士劇)。なお同書二二九頁以下の十一、畜類償債譚にもくわしい。

・手指三分只有一分底 よく判らないが、猪の手指が三分しているところの形容と同時に、「修福作利益」(償債譚の決まり文句でもあるが)の具体的な焼身手指(供養を行った結果とも考えられる。続高僧伝二十七遺身篇第七の釈僧崖の条にはすざまじい焼手指供養の場面がある)(大正蔵第五十卷一六七八b)。

一日有り其の道者、籃子を提げて梨を摘み籃に盛る次いで、師問う、籃裏底は是れ什麼ぞ。道者便ち籃子を覆却す。僧拈じて龍花に問う、只だ道者の籃子を覆却せるが如きは意旨如何ん。龍花云く、闇梨の拳は圓ならず。

ある日、その道者が籃をさげて梨を摘んでは籃に盛っていた時、師が尋ねた、籃の中は何だ。道者はすぐさま籃をひっくり返してしまふ。僧が龍花にこのことを取り上げて問う、たとえば道者が籃をひっくり返したのはどういつつもりですか。龍花が云う、お前の取りあげ方は完全ではない。

・道者便覆却籃子 師の問いに対して道者が逆に切り返した処。

・闇梨拳不圓 僧が籃を覆却したところだけを問題にしたのを衝いたもの。

経論を講ずる大徳有り、来りて師に参ず。師問う、教中は何を以てか躰と為す。對えて云く、如如を躰と為す。師云く、何を以てか極則と為す。對えて云く、法身を極則と為す。師云く、實なりや。對えて云く、實なり。師云く、喚んで如如と作せば早是すにす變ぜり。作摩生か是れ躰。大徳無對。此に因つて上堂せんことを索めて云く、今時の學士、類すら尚お辯じ得ず。豈に類中の異を并じ得んや。類中の異すら尚お弁じ得ざるに、作摩生か異中の異を并じ得ん。喚んで如如と作せば早是すにす變ぜり。直に須く異類中に向かつて行ずべし。

趙州和尚上堂して者个の因縁を拳して云く、這個は是れ先師の茶菓すじん師兄を勸せし因縁なり、と。人有つて便ち問う、如何なるか是れ異中の異。趙州云く、直た得とい毛を被らず角を戴かざれども、又た勿交涉。

ある経論を講ずる大徳がやって来て師に会つた。師が尋ねる、教中では何を体とするのか。答えて云う、如如を体とします。師は言つ、何を究極の抛りどころとするのか。答えて云う、法身を究極の抛りどころとします。師が云う、確かにそうか。答えて云う、確かです。師が云う、如如といえはもつすでにちがってしまふ。どのようなが体なのかね。大徳無對。此れに因んで臨時の

説法をして云う、最近の学者は類さえ手のつけようがないのにとつして類の中の異を始末できよう。類の中の異すら手がつけられぬのにとつに異の中の異が始末できようか。如如といえどもうすでにちがっている。どつしても異類の中においてやって行くべきだ。

趙州和尚は上堂説法でこの話をとりあげて云う、これは先師が茱萸師兄をためされた話である。ある人がすぐさま尋ねる、どの様なのが異の中の異でしようか。趙州が云う、たとえ毛がはえず角がはえなくてもかわり無し。

・類尚辯不得云 異類を異と類の二語に分けて説いている。

・茱萸師兄 趙州の兄弟子。伝灯録十。

師は大和八年甲寅の歳十二月二十五日遷化す。春秋八十七、僧夏五十九なり。劉軻碑銘を撰す。浄修禅師讚して曰く、南泉に出世して、大因縁の為にす。猫牛は有ることを委し、佛祖寧ぞ傳えん。高く線道を提げ、言詮を異却す。趙州室に入る、其れ誰れか焉を踵がん。

・異却言詮 異却の異は異類中行の異を踏まえている。南泉の一線道においては普通の言詮ではない言詮にまで高めたという意。南泉にあつては言詮そのものが異類中行であつた。

・劉軻の碑は現存せず。

瀉山和尚、百丈に嗣ぐ、潭州に在り。師、諱は靈祐、福州長溪縣の人なり。姓は趙。師は小乗は略して覽、大乘は精しく閲す。年二十三にして乃ち一日歎じて曰く、諸佛の至論は妙理淵深なりと雖いも、畢竟終に未だ是れ吾が棲神の地ならず。是に於いて錫を天台に杖いて智者の遺跡を礼す。数僧有りて相い随う。唐興路上に至りて一逸士に遇う。向前して師の手を執つて大笑して言く、余生に縁有り、老いて益々光る。潭に逢えば則ち止まり、瀉に遇えば則ち住す、と。逸士とは便ち是れ寒山子なり。国清寺に到るに、拾

得は唯だ師一人のみを喜重せり。主者偏黨を呵責す。拾得曰く、此れは是れ一千五百人の善知識なり。常に同じからず、と。介れ自り江西に尋遊して百丈を礼す。一たび玄席に湊りて更に他遊せず。

滄山和尚は百丈に嗣法して潭州に住んだ。師の諱は靈祐、福州長溪県の出身である。姓は趙。師は小乗は大まかに覽て、大乘は精しく閲た。二十三才のある日歎いて曰う、諸佛の究極の教えは妙理淵深だが、そこは終極的に自分の心を落ち着ける所ではない。そこで天台山に行脚して智者大師の遺跡を尋ねた。その時に数人の僧があとからついてきた。唐興県までやってくると逸土に会つたが、滄山の手を執つて、大笑いして言う、あなた之余生は縁有つて、老いれば老いるほど見事になる。潭に逢えば止まり、滄に遇えば住するでしょう。逸土というのは寒山子である。国清寺にやってくると、拾得は師一人だけを特別扱いにした。寺の主事が依姑鼻肩だと怒つた。拾得が云う、この人は普通の人ではない、一千五百人の善知識である。それから江西に行脚して百丈を師とした。奥深い教えの席に列するやいなや、もう他に行こうとはしなかつた。

・余生有縁云 滄山の將來を予言したもの。滄山が天台山に行ったという記事は寒山に出会う伏線となっている。

師、時有つて衆に謂いて曰く、是れ你諸人は只だ大識を得るのみにして大用を得ず。一上座有り、山下に在りて住す。仰山自ら下り来りて問う、和尚与摩に道う、意作摩生。上座云く、更に拳し看よ。仰山拳して未だ了らざるに上座に踏倒せらる。却帰来して師に拳似す。師は哂々として笑う。

師はある時、雲水に言つた、いったい君たちは大識は手に入れたが大用は得ていない。一人の上座が滄山のふもとに住んでいた。仰山がみずから下りていつて尋ねた、和尚があのように言つのは何のつもりだろうか。上座が云う、もう一度その話をしてみよ。仰山は話しおわらないうちに上座にけたおされてしまった。引き返して師に言つと師は哂々として笑つた。

・只得大識云 伝灯録巻九では大識を大機としている(明本)。大識が原形であろう。

・上座踏倒 上座が大用を仰山に示したところ。

師、仰山と語話する次いで、師云く、只だ汝の声を聞くのみにして、子の身を見ず、出で来たれ、見んと要す。仰山便ち茶樹を把つて揺して對す。師云く、只だ其の用を得るのみにして其の躰を得ず。仰山却つて問う、某甲は則ち任摩、和尚は如何ん。師良久す。仰山云く、和尚は只だ其の躰を得るのみにして、未だ其の用を得ず。師云く、子、与摩に道えば你に二十棒を放す。

師が仰山と話していた時師が云う、お前の声が聞こえるだけでお前の身体は見えぬ、出て来なさい、見たいものだ。仰山はすぐに茶の樹をつかんで揺すって對える。師が云う、はたらきを得ただけでその本体は手に入れてない。仰山が反対に尋ねる、私はこのようですが、和尚はどうですか。師は良久する。仰山が云う、和尚はその本体は手に入れているが、そのはたらきは得ていない。師が云う、お前がその様に云うなら、お前に二十棒をゆるしてやろう。

・把茶樹揺對 茶摘みをしていた時の話。茶の樹をつかんで揺するといふ態度で答えたもの。

師、道吾に問う、火を見るや。吾云く、見る。師云く、見は何れ従り起る。道吾云く、行住座臥を除却して更に一問を請う。

師が道吾に尋ねる、火が見えるか。吾が云う、見えます。師が云う、見はどこから起るのか。道吾が云う、行住座臥を除いたところで、どうかお尋ね下さい。

・見には見るといふ意味と、それ自身が輝き出るといふ意味の二面性がある。

僧有り、師を礼拝す。師起つ勢を作す。僧云く、請う和尚起たされ。師云く、未だ曾つて坐せず、礼するを要せず。僧云く、某甲未だ曾つて礼せず。師云く、何故に無礼なる。

ある僧が師を礼拝した。師は起つ格好をした。僧が云う、どうか和尚さん起たないで下さい。師が云う、いまだかつて坐つたことがない、礼拝など必要ない。僧が云う、私はいまだかつて礼拝したことはない。師が云う、どうして無礼なんだ。

師遷化に臨みし時、衆に示して云く、老僧は死後山下に去きて、一頭の水牯牛と作らん。脇上に両行の字を書して云く、瀉山の僧某專甲、と。与摩の時喚んで水牯牛と作すや、喚んで瀉山の僧某專甲と作すや。若し喚んで瀉山の僧と作さば、又た是れ一頭の水牯牛なり。若し喚んで水牯牛と作さば、又た是れ瀉山の僧某專甲なり。汝諸人作摩生。後に人有つて雲居に拳似す。雲居云く、師に異号無し。曹山代わつて云く、喚んで水牯牛と作す。

師が遷化しようとした時、大衆に云う、わしは死んで後、山下に行つて一頭の水牯牛となる。脇上に二行書して云う、瀉山の僧のだれそれ、と。そうなつた時水牯牛と喚ぶか、それとも瀉山の僧だれそれと喚ぶか。もし瀉山の僧と喚べば、どっこいそれは一頭の水牯牛だし、水牯牛と喚べば、それはどっこい瀉山の僧だれそれである。お前たちここをどうするか。後にある人が雲居にその話をしたところ、雲居が云う、師には違つたよび名はない。曹山が代わつて云う、わたしは水牯牛という。

師、時有つて仰山に浄瓶を与つ。仰山纔かに接するや、師は乃ち手を縮めて云く、是れ什摩ぞ。仰山云く、和尚は什摩を見るや。師云く、你若し任摩ならば、何に因つてか更に我に就いて覓む。仰山云く、此の如しと雖然も、人義途中、和尚の与に瓶を提げ水を掬ぐ、亦た是れ本分なり。師は浄瓶を過して仰山に与つ。

・ 是什摩 わしがお前に与えようとして引つ込めた、今ここにないものは何だ。碧巖録五十一則雪峯是什摩の条参照。

又た問う、如何なるか是れ西来意。師云く、太だ好き燈籠。山云く、只だ這個便ち是なること莫きや。師云く、這個は是れ什摩ぞ。仰山云く、太だ好き燈籠。師云く、果然して見ず。

・ 莫只這個 それがつまり西来意ということですね。

・ 果然不見 前は太だ好き燈籠しか見えていない。西来意が判つてない。

師は仰山と行く次いで、師、枯樹子を指して云く、前頭は是れ什摩ぞ。仰山云く、只だ是れ个の枯樹子。師は背後の田を挿す公を指して云く、这个の公すら向後亦た五百の衆有らん。

・只是个枯樹子 剛直さの語気。

・这个公云 あの農夫ですら将来五百人の弟子を持つ様になろう。仰山に対する痛烈な批判。

隱峯、瀉山に到り、上座頭に於いて衣鉢を放下す。師、師叔の来たれるを聞いて、先に威儀を具し来つて相看る。隱峯師の来たるを見て、便ち伴睡す。師法堂に帰る。隱峯便ち發ち去る。師、侍者に問う、師叔在りや。對えて云く、去れり。師云く、師叔去りし時什摩をか道いし。對えて云く、無語。師云く、無語と道う莫かれ。其の聲雷の如し。

・隱峯 馬祖の弟子鄒隱峯。

徳山行脚せし時瀉山に到る。三衣を具して法堂前に上り、東觀西觀し了りて便ち發ち去る。侍者和尚に報じて云く、適来せきらいの新到、和尚に參せずして便ち發ち去れり。師云く、我早す个こに相見し了れり。

徳山が行脚していた時、瀉山にやって来た。三衣を具して法堂の前までやってきて、東をつかがい西をつかがいしたのち立ち去った。侍者が和尚に知らせて云う、さきほどやって来たばかりの僧が和尚に会わずに行ってしまった。師が云う、わしはとくに相見したわい。

・この一段、碧巖録第四則に引かれ、変化を示している。

師、侍者をして第一座を喚ばしむ。第一座来たる。師云く、我れ第一座を喚べり。閻梨かかわが什摩の事にか干らん。曹山代わつて云く、

和尚若し侍者をして喚ばしむれば、但だ恐らくは来たらざりしならん。

師は侍者に第一座を呼ばせた。第一座が来る。師が云う、わしは第一座を呼んだんだ。お前さんのなにに関係があるというのだ。曹山が代わって云う、和尚さんがもし侍者に呼ばせたのなら、おそらく来なかつたでしょう。

・第一座がどんな来方をしても、たとえば魏魏堂堂、焯焯煌煌としてやって来て、師のこの様なつっぱなし方はあり得るであろう。百丈が侍者を打った因縁を思い出させるが、齊雲和尚の伝に、「因説百丈打侍者因縁。有人拈問、百丈打侍者、為上座打、為侍者打。師云、理正不了、累及家丁」とある。この中、「理正不了、累及家丁」というのは、和尚がしっかりといてないから弟子がめいわくするという意。

師、雲岳に問う、承らくは久しく薬山に在りと、是なりや。對えて云く、是なり。師云く、薬山大人の相如何ん。對えて云く、涅槃後の有。師云く、如何なるか是れ涅槃後の有。對えて云く、水洒不著、雲岳却って問う、百丈大人の相如何ん。師云く、魏魏堂堂、焯焯煌煌。聲前にして聲に非ず、色後にして色に非ず。蚊子鐵牛に上る、你が鬚を下るすの處無し。

師が雲岳に問う、君は久しく薬山に居ると聞くが、ほんとうか。對えて云う、そうだ。師が云う、薬山和尚は、大人相はどんな具合だ。對えて云う、涅槃後の有だ。師が云う、涅槃後の有とは。對えて云う、水で洗えない。今度は雲岳が問う、百丈和尚は、大人相はどうだ。師が云う、魏魏堂堂として、あかあかかかやいており、声前の存在で声でなく、色後の存在で色ではない。鉄牛にとまった蚊のようにくちばしの入れようがない。

・涅槃後有 茗溪和尚の伝にいう「問、如何是正修行路。師云、涅槃後有。僧云、如何是涅槃後有。師云、無洗面。僧云、學人不會。師云、無面可洗」

・水洒不著 つまり無面可洗。

・魏魏堂堂焯焯煌煌 仏像のイメージ。

・聲前非聲色後非色 金剛經「若以色見我、以音聲求我、是人行邪道、不能見如来」

瀉山物を提げて仰山に問う、正に与摩なる時作摩生。仰山云く、和尚還た見るや。瀉山肯わず、却って仰山をして問わしむ、正に与摩なる時作摩生、と。師云く、正に与摩なる時亦た作摩生無し。師却って云く、与摩に道うも亦た得ず。此れ従りして休む。数年を隔てし後、仰山語有り、師に拳似して云く、切に忌む、教素著なることを。師聞きて云く、囚を停めて智を長せしめたり。

瀉山がものをとり出して仰山に問う、まさにこの時どつだ。仰山が云う、和尚さんには見えるのですか。瀉山は肯わずに仰山に、まさにこの時どつであるかと問わせて、師は云う、まさにこの時にはどつだということもない。そう云うてから師は云う、こつ云うてもだめだ。そこで問答は打ち切りになった。数年ののち、仰山は答を見出し師に拳似して云うた、切にぶしつけをやることをはばかります。師がそれを聞いて云う、囚人を永いこととどめておいて智慧をつけさせたいわい。

・教素 唐突、ぶしつけ。

・停囚長智 ほめ言葉。

仰山の瀉山に在りし時、牛を見る次いで、第一座云く、百億毛頭に百億の師子現す。仰山第一座の与に便ち前話を拳して問う、適来百億毛頭に百億の師子現すと道いしは豈に是れ上座ならずや。云く、是なり。仰山云く、毛前に現するや、毛後に現するや。上座云く、現する時は前後を説かず。仰山便ち出で去る。師云く、師子暫折せり。

仰山が瀉山にいたころ、牛の番をしていたおり、第一座が云うた、百億の毛先に百億の獅子が現れる。仰山は第一座に対してその話を拳似して問う、さっき百億の毛先に百億の獅子が現れると云うたのはあなたでしたな。上座が云う、そつだ。仰山が云う、毛前に現れるのですか、毛後に現れるのですか。上座が云う、現れる時は前後を云わない。仰山はさつさと出で行く。師が云う、獅子は腰骨が折れた。

・伝灯録十一仰山の伝では、「師在瀉山牧牛時、第一座曰、百億毛頭百億獅子現。師不答、歸侍立。第一座上問訊、師拳前話問」となっており、祖堂集よりは状況がはっきりする。なお五家録では、第一座のかわりに踢天泰上座となっている。

洞山問う、和尚は此間すかんに在りて住しし摩の學禪契會底の人有りや。師云く、初めて此の山に住してより一人有り。是れ石頭の孫、葉山の子なり。

・編集者の意図ではおそらく次の一段とつづけたものであろうが、どうも話がつながらない。石頭之孫、葉山之子は雲岳である。洞山録によると瀉山に参じた洞山が南陽忠國師の無情説法の話をとりあげたところ、「瀉山云、我這裏亦有、祇是罕遇其人。師云、某甲未明、乞師指示。瀉山豎起拂子云、會麼。師云、不會。請和尚説。瀉山云、父母所生口、終不為子説。師云、還有与師同時慕道者否。瀉山云、此去灑陵攸縣、石室相連、有雲巖道人。若能撥草瞻風、必為子之所重。師云、未審此人如何。瀉山云、他曾問老僧、學人欲奉師去時如何。老僧對他道、直須絶滲漏始得。他道、還得不違師旨也無。老僧道、第一不得道老僧在這裏」というこの話を伝える資料の断片のようである。

仰山田中より帰る。師云く、田中多少の人有りや。仰山遂に鎌子を挿下し、又手して立つ。師云く、今日南山に大いに人有つて茆を刈れり。人有り順徳に問う、只だ瀉山の、南山に大いに人有つて茆を刈れりと道うが如きんば、意作摩生。順徳云く、狗赦書を嚼みて、諸臣路を避く。

仰山が田んぼから帰って来ると師が云う、田んぼにはどれほどの人間がいたか。そこで仰山はすきくわを地にさして又手して立つた。師が云う、まことに今日は南山にかやを刈るものがいたわい。ある人が順徳に問う、瀉山和尚ですが、南山にかやを刈るものがまことにいたわいと云ったのは、どういふつもりですか。順徳が云う、犬が赦書をくわえると、諸臣が路を避ける。

師、雲岳に問う、尋常什摩と道うぞ。對えて云く、某甲が父母所生の口は道い得ず。僧問う、某甲師を奉じ去らんと欲する時如何ん。師云く、他に向かつて道え、直に須く滲漏を絶して始めて他に似るを得べしと。僧云く、還た尊旨に達せざることを得るや。師云く、他に向かつて道え、第一に老僧這裏に在りと道うを得ざれ。

・前々段の注を参照して更に本文を修訂すべし。

雲岳、瀉山に到る。瀉山壁に泥する次いで問う、有句無句は藤の樹に倚るが如し。樹倒るれば藤枯るる時作摩生。雲岳無對。道吾に拳似す。道吾便ち去きて瀉山に到る。師便ち前問を置く。問い未だ了らざるに道吾便ち奪いて云く、樹倒るれば藤枯るる時作摩生。師對えずして便ち房丈に入る。

雲岳が瀉山にやうて来た。瀉山は壁を塗っていたが、問う、言葉は樹にからんだ藤のようなものだ。樹が倒れば藤は枯れる。この時どうする。雲岳無對。のち道吾にこの話をする。道吾は瀉山に行った。そこで師は前の質問をしたが、問いおわらないうちに道吾が奪いとして云う、樹が倒れば藤は枯れる、この時どうする。師は答えずに方丈に入る。

・有句無句 宝鏡三昧に「如世嬰兒、五相完具、不去不来、不起不住、婆婆和和、有句無句、終不得物、語未正故」とある。

・奪云 質問者たる瀉山の立場を奪いとして云った。

・師不對便入房丈 樹がドタツと倒れたような感じ。

師、仰山に向かつて云う、寂闇梨、直に須く學禪して始めて得べし。仰山便ち吟すらく、作摩生か學ばん。師云く、單刀直入。僧拈じて石問に問う、只だ瀉山の与摩に道うが如きんば、意作摩生。石門便ち顧示す。

師が仰山に云う、寂さん、どうしても禪を學ばなければならんよ。仰山はハアツと云うて云う、どう学ぶのですか。師が云う、

単刀直入だ。僧がこの話をとりあげて石問に問う、瀉山があのようにいったのはどういふつもりですか。石問は願示する。

・直須學禪始得 仰山の諱の寂の字にひっかけて云ったものである。

・単刀直入 伝灯録卷九瀉山の伝に「若也単刀趣入、則凡聖情盡、體露眞常、理事不二、即如如佛」とある。

・願示 よくわからないが、視線をそらして何かをするのであろう。睡龍和尚の伝に「因雪峯問玄沙、汝還識國師無縫塔也無。玄沙却問、無縫塔闊多少、高多少。雪峯願示。玄沙云、和尚何得自犯」とあるのを参照。

京中大師有り、瀉山に到る。和尚に参じて後ち對坐して茶を喫する次いで、問を置く。當院に多少の人有りや。師云く、千六百人有り。大師云く、千六百人中、幾人か和尚に似ることを得たる。師云く、大師与摩に問いて什摩をか作す。大師云く、和尚を知らんと要す。師云く、中に於いて也た潜龍有り、亦た現人有り。大師便ち衆僧に問う、三界を鼓と爲し、須弥を槌と爲して什摩人か此の鼓を撃たん。仰山云く、誰か汝が破鼓を撃たん。大師破處を搜覓するも得ず。此れに因りて被納學禪す。人有り拈じて報慈に問う、什摩の處か是れ破處。報慈云く、什摩年中徐に向かつて与摩に道いしや。僧云く、畢竟作摩生。報慈便ち打つこと一下す。

・什摩年中向棄与摩道 いつだれがお前さんに破處があるなどと云ったのか。

・便打一下 僧の破處を打ったのであろう。

師、仰山と遊山して一處に坐す。老鷗の红柿子を銜み来りて師の面前に置く。師は手を以て拈じ来たり、一片を分破して仰山に与う。仰山受けずして云く、此は是れ和尚感得したる底の物なり。師云く、此くの如しといえども理は同規に通ず。仰山危手して接待し了り、便ち礼謝して喫す。

師、匡化すること四十二年、宗教を顕揚せり。大中七年癸酉の歳自り示化す。春秋八十三、僧夏六十四なり。大圓禪師清淨の塔と

勅諭す。

黄蘗和尚、百丈に嗣ぐ、高安縣に在り。師諱は希運、福州閩縣の人なり。少自り黄蘗寺に於いて出家す。身長七尺、額に肉珠有り。閩閩の天生、小節に拘せず。

初め二三の時流と天台山に遊ぶ。途に在りて偶ま一僧を接す。師と同道し、言笑して便ち曩故に同じ。道溪碕に到る。時に水汎漲するに遇い、遂に歩を阻みて暫息す。其の僧師を催して共に渡らしめんとす。師は之を疑わずして云く、渡らんと要すれば但だ自ら渡れ。其の僧衣を斂めて波を躡んで渡る。彼の岸に至り已るや廻顧して招手し、師をして渡らしめんとす。師乃ち呵して云く、この賊漢、預め知らざりしことを悔ゆ。若し知りたらば則ち打して脚を折りしならん。其の僧嘆じて曰く、大乘の器なる者なるかな。吾が輩及ばざるなり。言已つて忽然として隱る。

後に上都に遊ぶ。分衛を行ずるに因りて一門に造りて云く、家常。屏後に老女有りて云く、和尚太だ黙くこと無し。師は其の言を聞きて云く、鉢猶お未だ得ず、何ぞ黙くこと無しと嘖めん。女云く、只だ這个、豈に是れ黙くこと無きならずや。師聞きて駐まりて微笑す。阿婆師を覩るに、容儀堂堂として特に常僧に異なれり。遂に命じて内に入らしむ。供するに齋喰を以てし、畢つて參學の行止を詢問す。師隱す能わず、見地を揭露す。阿婆再び微闕を挙す。師則ち玄門頓にして蕩豁す。師は重ねて言を致して謝し、師承せんと擬欲す。阿婆曰く、吾は是れ五障の身、故より法器には非ず。吾れ聞く、江西に百丈大師有り、禪林の郢匠にして特に群峯に秀ずと。師は彼に詣りて參承すべし。責ぶ所は他日人天の師と為らんことを。後人傳説すらく、此の婆、少年にして曾つて忠國師に參見せりと。

・原文師聞其言の下に「異探而拔之」の五字あり。読めないで今は仮に省いておく。

・ 謁露見知、阿婆の下に「提以」の二字あり。右に同じ。

・ 他日為人天師の下に「法不輕未耳」の五字あり。右に同じ。

師は遂に言に依りて百丈に造り礼して問う、従上相承の事、和尚は如何に人に指示するや。百丈良久す。師曰く、後人をして断絶し去らしむるべからず。百丈云く、我れ本と將に汝は是れ一人の人と謂へり。遂に起ちて丈室に入り、其の戸を掩わんとす。師云く、某甲の來たるは只だ這个の印信を要するのみにして足る。丈廻りて言く、若し然らば他後、吾に辜負することを得ざれ。師遂に駐泊し、時歳を延ぶ。後、黃檗山に居り玄徒競い湊り、法鼓囊中に震い、緇素風に奔り、智炬海内に揚ぐ。高安県令見已つて方乃めて稽首し泯伏して詩有り讚して曰く、曾つて伝う達士心中の印、額には円珠有り七尺の身。掛錫すること十年蜀水に棲み、盃を浮かべて今日漳浜を渡る。一千の龍象高歩に随い、万劫の香花勝因を結ぶ。願わくば師に事へて弟子とならんと欲す、知らず法をもつて何人に付するや。

師はお婆さんの助言に従つて百丈の所に行つて礼拝して訊ねた、昔よりこのかた受け伝えた事を、和尚はどの様に人にお示しになりますか。百丈はしばらく黙つていた。師が云つた、後世の人に断絶させてはなりません。百丈が云つた、私は今までお前はかどの人物だとばかり思つていたのだが。そう云つて起ち上がり、方丈に入つて戸を閉めようとした。師は云つた、私がわざわざやつて来たのはただこの印をいただきただけです。百丈は振り返つて言つた、そういうことならば将来私の期待を裏切つてはならないぞ。そこで師はそこにとどまり、何年かを過ごした。その後、黃檗山に住し、修行者達が競い集まり、仏法の鼓の音は国中にひびき渡り、僧俗共にその風を慕つて走り、智慧の炬火が海内に高く揚げられた。高安県令はお目通りをして稽首しひれ伏して、讚嘆の詩を作つた。その昔秀れたお方の心中の印を伝え、額には円珠があり七尺の堂々たる身体をもつ。十年の間蜀水に掛錫し、今では南昌に移つて來られた。一千の秀れた修行者達がその気高い歩みに随い、万劫変わらぬ香花は勝れた因縁を結びつづける。私も師に事えて弟子となりたいものだ、師は法を一体誰にお授けになるのだろうか。

僧問つ、如何なるか是れ西來の意。師、之を打つ。

師、衆に謂いて曰く、是れ你諸人顛を患つて那作摩。棒を把つて一時に趁い出だして云く、盡く是れ一隊の酒糟を喫するの漢、与摩に行脚すれば人を笑殺し去らん。兄弟ひんてい、只だ八百二十人の處を見て那裏に去くのみなること莫れ。只だ熱鬧を圖るのみなる可からず。老漢行脚せし時、或いは草根下に个の老漢有るに遇著せば、便ち頂顛上より一下の錐を卓原作啄す。他かれを見て若し痛痒を識せば、便ち布袋を將つて米を盛りて他に供養せり。古人个中に惣に你に似て与摩に容易ならば、何れの處にか更に今日の事有らん。兄弟、行脚人亦た須く物子の精神を著くるべくんば好し。汝ま還た知るや、大唐國內禅師無きことを。

人有りて問う、諸方の尊宿盡く皆な匪化す。和尚什摩と為てか禅師無しと道うや。師云く、禅無しとは道わず、只だ師無しと道うのみ。

又た云く、闇梨可あに見ずや、馬大師下に八十八人有りて道場に坐するも、馬大師が眞正の法眼を得し者は只だ一二有るのみ。廬山は是れ一人なり。夫れ出家なる者は、須く従上來の事有ることを知るべし。見ずや四祖下に牛頭融大師有り。横説豎説するも未だ向上の一閑挨拶有ることを知らず。若し此の眼腦有らば妨げず邪正の宗儻を弁じ得ることを。當人の事、會得する能わずして、但だ言語を念じて皮袋裏に學向するを知るのみにして、到處に便ち道う、我れ禅を會し道を會すと。還たは你が輪廻を替え得るや。老宿を輕忽して地獄に入ること箭の射らるるが如し。我亦た汝行脚人の門を見るや便ち汝を識得し了れり。還た知るや、諸人亦た須く意在おに在ぎて急急に努力すべし。只だ取次容易にして一片の衣、一口の食を持するを事として一生を過はさんと擬するのみなること莫れ。明眼の人你を咲わん。久しき後惣に俗漢の弄もび將ち去ることを被らん。切に須く自ら近遠を看すべし。且く是れ阿誰面上の事ぞ。若し會すれば則ち便ち會せん。若し會せざれば則ち散じ去れ。珍重。

師は大衆に向かつて云つた、ほかでもないお前さんたち、瘋癲を患うとはなんだ。そう云つて棒をとつて一時に追い出して云つ、

みんなひつくるめて酒糟喰らいだ。そんな修行の仕方をしていると人を笑いこけさせるぞ。兄弟よ、ただ八百人千人集まる所を見てそこへ行こうとばかりするな。ただにぎやかにしようとはかり考えてはならない。このわしは修行時代、野っばらで修行者に遇うことがあると、頂門から錐を一突きし、やつこさんを見てもし痛痒がわかるようなら、袋に米を盛って彼に供養したものだ。古人がもしお前さんのように安直にしていたら、どついう道理で更に今日の事が有ったろうか。兄弟よ、修行者なら少しはしっかりしてもらいたいものだ。お前さんが知っているか、大唐国内に禅師はないぞ。

ある僧が問う、諸方の尊宿方は皆な教化されています。なのに和尚さんはどうして禅師がないとおっしゃるのですか。師が云う、禅がないとは云ってはいない。ただ師がないといっているだけだ。

また云う、お前さんたち知っているだろう。馬大師には門下に八十八人あつて坐禅修行をした。しかし馬大師の真正の法眼を得たものは一二あつたにすぎない。廬山和尚はその一人である。

出家というものは、従上来の事の有ることを知らねばならない。知っているだろう。四祖の下に牛頭法融大師が有つて、横説豎説したがまだ向上の一関抜子の有ることを知らなかった。もしこのめだまが有るならば邪正の宗儻を見分けるのもなかなかのものがある。當人の事すら會得し得ず、ただ言語を念じて皮袋の中に学びこむことを知っているだけで、いたるところでわしには禅が解つておる、道が解つておると云う。そんなことで自分の輪廻ととり替えることができるか。老宿をかるんじて射られた矢のように地獄に入るぞ。わしはお前さん方修行人が門に入るのを見たたんお前さん方を見てとつてしまつてゐるぞ。知っているか、みんな意に置いて急急に努力せねばならない。おいそれと安直に一片の衣、一口の食を持するのを事として一生を過ごそうとしてはならない。そんなことでは明眼の人がお前さん方を笑つぞ。のちのちきつと俗漢になぶられることになるぞ。是非とも自ら近遠を見なければならぬ。誰の面目上のことだというのだ。若しわかればするりとわかる。若しわからなければ散じ去れ。珍重。

・ 那作摩 句末の作摩にはば同じく詰問の語気を添える。

・ 若識痛痒 仙宗和尚の伝に「問、學人常在昏沈、請師驚覺。師以杖打之云、若識痛痒、則古佛齋肩」(三一—四四頁)とあ

るのを参照。

・古人个中惣似你与摩容易 伝灯録は可中總似汝如此容易。个中は可中の誤写であろう。

・廬山 帰宗智常を指す。

・夫出家者より邪正宗儻まで正法眼蔵第二十八佛向上事の巻に引かれる。

・横説豎説云 龍潭和尚の伝に古人道として引かれる(四一二頁)。

・當人事 伝灯録九福州龜山智眞禪師の伝に「一日示衆曰、動容眴目無出當人一念淨心、本來是佛」とあるのを参照して、

當人の事と読んでおく。

・一口食 原文は口食、一の字を補う。

保福、師の語を挙げて云く、禪無しとは道わず、只だ師無しと道つのみ。福拈じて殿主でんすに問う、作摩生か是れ禪の与に師と為る底の人。殿主は和尚の手中の杖を指して云く、某甲這个の柱杖を惜しむ。保福肯わず。殿主却つて問う、作摩生なるか是れ禪の与に師と為る底の人。保福云く、我れ這个の柱杖を惜しまず。

蓮花漳州の報恩に在りし時、僧問う、只だ保福の柱杖を惜しまずと道つが如きんば意作摩生。報恩云く、他は大意は則ち是なるも、只だ是れ憑執無し。僧云く、只だ憑執有るが如きんば意作摩生。報恩云く、柱杖を惜しむことは則ち肯わず。僧却つて問う、作摩生なるか是れ禪の与に師と為る底の人。報恩乃ち柱杖を放下して方丈に帰る。

僧、鼓山に問う、只だ蓮花の柱杖を放下するが如きんば、意作摩生。師云く、什摩の所在ぞ。僧云く、只だ事の如きは柱杖を放下せし處に在りや、事は方丈に帰りし處に在りや。鼓山趁い出して云く、這裏に向かつて出頭すること莫れ。

保福が師の言葉を挙げて云う、禪が無いとは云わない。ただ師が無いと云うのだ。保福は拈じて殿主に問う、どのようなのが禪にとつて師となるような人か。殿主は保福和尚の手中の杖を指さして云う、わたしはこの柱杖を惜しみます。保福は肯わない。殿

主の方から問う、どのようなのが禅にとって師となるような人ですか。保福が云う、わしはこの柱杖を惜しまない。

蓮花が漳州の報恩寺に居た時、僧が問うた、たとえば保福和尚が柱杖を惜しまないと云ったのはどういふつもりだったのでしょうか。報恩が云う、彼は大意は結構だがしかし証拠がない。僧が云う、では証拠があるとはどういふ意味ですか。報恩が云う、柱杖を惜しむことは肯わない。そこで僧が問う、どのようなのが禅にとって師となるような人ですか。すると報恩は柱杖を置いて方丈に帰った。

僧が鼓山に問う、あの蓮花が柱杖をおいたのはどういふつもりですか。師が云う、どういふ問題の在り所だというのだ。僧が云う、たとえば事は柱杖をおいたところにあるのですか、方丈に帰ったところにあるのですか。鼓山は追い出して云う、ここに顔を出すな。

・ 与禅為師底人 百丈の前の問答の「不道無禅、只道無師」という言葉から禅は無いのではないから、所謂律師、法師と並べ上げる時の禅師はいないわけではない。しかも師無しというのだから、「大唐國內無禅師」の師は与禅為師底人でなければならぬと解釈してこの問いが出て来たのであろう。

・ 惜這个柱杖 せつかくのこの柱杖が泣いておりますよ。

・ 不肯 禅を柱杖に依存せしめているところを肯わなかつたのであろう。

・ 只是無憑執 今自分が憑執となつてやろつといふことらしい。あとはその憑執三昧である。

保福拳するを聞きて云く、更に一般底有り。錘するも又た錘不動。召すも又た召不應。此の人作摩生か虚と実とを委し得ん。翠岳云く、兄は則ち米を乞え、某甲は則ち柴を拾わん。保福云く、与摩ならば則ち布袋を舐きて浴褌を造り著せよ。

保福和尚は師の語を聞いて云った、更にある種のもが居て、錘しても錘することができないし、名を呼んでも応じさせることができない。この人はどのようにしてその虚実を明らかにするか。翠岳が云う、あなたは托鉢にいらっしやい。わたしは山に柴か

りに。保福が云つ、そういうことなら頭陀袋を裂いて浴褌でも作りなさい。

・虚之与實 供養に値するかどうか。

・与摩則旃布袋造浴褌者 そういうことなら山から拾ってきたたき木で風呂でもわかし、要らなくなった布袋で浴褌でも作つてその臭皮袋を盛りなさい。それが君の虚実に対するわたしの供養でもある。

師行脚の時、塩官に到る。塩官一日有りて云く、色即是空ならば空義成らず。空即是色ならば色義成らず。師出で来たりて問つ、承らく和尚に言有り、色即是空ならば空義成らず、空即是色ならば色義成らずと。豈に是れ和尚の与摩に道いしならずや。塩官云く、是なり。師禅床を敲きて云く、這個は是れ色なり、阿那个か是れ空なる。塩官對えず。

・阿那个是空 この色以外のどれが空であるか。巖頭和尚の伝に、雪峯が塩官のこの語を聞いて个の入處を得たと云つて、巖頭に叱りとばされているところがある(二一九三頁)

師、八百来人を領して洪州に到り、州主を見る。州主手に越杖を執りて便ち師に問う、這個は是れ什摩の字ぞ。師云く、一點を欠く。便ち州主を掴す。便ち礼拝して師と為す。

師は八百人ばかりを引きつれて洪州に行き、州主と会見した。州主は手に越杖をとつて師に問つた、これは什摩の字だ。師は一點欠けておりますと云つて州主にゲンコツを喰らわせた。州主は礼拝して師とした。

・州主 裴休。

・越杖 不明。越の地方特産の杖であろうか。

裴相公一日有つて徹徹底に不安。久しきに非ざるの間にして便ち死す。師は恰も宅裏に在り。相公を抛たず、頭邊底に坐して相公

を看る。相公無限の時にして却つて惶す。惶せし後冥中の事を説く、某一たび冥界に入るや、脚有るも曾つて行かず、眼有るも曾つて見ず。个の四五十里を行き得て便ち困し了れり。忽然として一池水を見たり、某甲池に入らんと擬欲せしに一個の老和尚有り。某甲を与して池裏に入らしめずして便ち喝せり。此れに因りて再び和尚に見えたり。師云く、若し老僧に遇わざりせば、相公は泊合んど龍と造りしならん。

裴相公はある日しんねりと病んだが、間もなく死んだ。師は丁度その屋敷にあり、相公を捨てずに枕辺に坐つて相公を看取つていた。相公は久しい時間のあと甦つた。甦つて後冥土の出来事を説明して云つ、わたしは冥界に入るや、脚はあつても歩けず、眼はあつても見えなくなりました。それでも四五十里ばかり行つたところであつたはてました。ふと池が見えます。わたしは池に入ろうとしました。すると一人の老和尚がわたしを池の中に入らせずにどなりつけました。それで再び和尚さんにお目にかつたのです。師が云う、もしこのわしに遇わなんだら相公は龍になつていてるところですぞ。

・ 微微底不安 　どんな風な病み方なのかよくわからない。

・ 不抛相公云 　この話しに似たものが南泉の伝にもあるが、冥界にも届く定力で相公を見守つていたことを意味するようである。

師又の時に握拳して云く、諸方の老宿は性命捨に這裏に在り。放つも也た得たり、放たざるも也た得たり。僧拈じて招慶に問う、諸方の老宿は性命捨に這裏に在り、放たんと要するも也た得たり、放たんと要せざるも也た得たり。如何なるか是れ放たんと要する底の事。慶云く、侖が此の問を恕す。如何なるか是れ放たんと要せざるの事。招慶云く、二十打を与つるに好し。

自餘未だ行録を見ず。勅謚断際禅師廣業の塔。

西林操和尚、百丈に嗣ぐ。師、大瀉と行きし次いで、忽然として驢の喫する底の草を見て、師、驢の喫する底の草を取って、大瀉に向かつて云く、吽吽。大瀉両手もて地を托するや、便ち驢聲を造す。師喝して云く、この畜生しゆくせい。大瀉云く、適来せたい什摩を見しや。師便ち掴す。

人有って拈じて龍花に問う、作摩生か道はば、則ち操禪師の掴することを免れ得たる。花云く、泊んど一向ならんとす。

西林和尚は百丈に嗣法した。師は大瀉といつしよに歩いていたとき、ふと驢が草を食べているのを目にして、師は驢の食べている草を取って大瀉に向かつて云う、吽吽ムツムツ。大瀉は両手を地につけて四つん這いになるや、驢の鳴き声をした。師はどなりつけて云う、この畜生め。大瀉が云う、いま何を見られたのですか。師はすぐさまなぐりつけた。

ある人が龍花和尚にこの話をとりあげてたずねた、どのようにいえば操禪師のゲンコツをうけずにすんだでしょうか。龍花が云う、もう少しでわき目も振りず……となるどころでした。

・驢喫草 驢の草を食べる様子がいかにも「但念水草、餘無所知」(卷十六一一二)だったのである。

・吽吽 大瀉(瀉山)に対するさそいかけの言葉。

・適来見什摩 大瀉の如法な受けとめ方を要求したのに、さらに自分を客観視している返事が西林には気に入らなかったのか。

・泊一向 下に「造驢」の二字を補った方がよい。あやつく驢になろうとはかりするところでした。

自餘、化縁終始を究めず。

古靈和尚、百丈に嗣ぐ、福州に在り。師少自り福州大中寺に於いて出家す。僧と為るに至るに及び、百丈に遊参す。盤泊すること数年、密に玄旨に契つ。

後ち帰省し本師に侍す。發悟せしめて以て其の恩に報いんことを思欲し、方便を候つ。偶ま因みに一日、師の爲めに澡浴し垢を去るの次いで、師の背を撫でて曰く、好个の佛殿なるも而かも佛は聖ならず。其の師は乍ち異語を聞き、頭を廻らして之を看る。弟子曰く、佛は聖ならずと雖も、且らく能く光を放つ。師は深く疑うも而かも問う能わず。

後に一日を得て、新たに窓に糊す。其の日窓を照らして陪いいよ明らかなり。師は窓下に置いて看經する次いで、蠅子競頭して其の窓を打つて出路を求覓す。弟子侍立して云く、多少の世界、如許多に廣闊なるに、而かも肯えて頭を出さずして故紙裏に撞つ。驢年も解く出づることを得んや。師は此の語を聞きて、經卷を放下して問う、汝は行脚し來りて、何人に見みえ、何の事意を得たるや。前後汝の發言を見るに、蓋し常に同じからず。汝子細に吾れに向かつて説き看よ。弟子問われて恰も本意に稱い、爲めに百丈大師の指授せし禪門心要を説くらく、靈光洞かに耀やき、迴かに根塵を脱す。真常を躰露し、文字に拘わらず。心性無染、本自もとより圓明。妄縁を離却すれば、則ち如如佛なり、と。師言下に於いて万機頓に息み、嘆じて曰く、不可思議なり。吾れ本と佛を聞いて將さに獨一と謂えりしに、今始めて心源を返照するに、有情皆な介かり。

因つて同流に謂そな原作爲いて曰く、我が弟子行脚して上人の法を得たり。我れ其の恩に返答せんと欲す。汝當さに佐助せよ。衆は爲めに筵そなを備え、法座を敷き畢わり、弟子を請じて昇座して略ぼ百丈の宗教を演ぜしむ。衆は未だ聞かざる所を聞いて、悉く皆な忻慶す。師弟子に謂いて曰く、吾は汝の剃髮の師た爲り、汝は今吾が出世の師爲り。吾れは今汝に返礼して以て其の恩に答えんのみ。弟子は座を下つて曰く、此れは世の礼に乖く、事不可なり。師若し然らば、當應あたに西に面して遙かに百丈を礼して、師と爲すべし。即ち是れ道を同じゅうして異らざるなり。師は則ち之に従い、遙かに百丈を礼して師と爲す。

後ち、福州に歸つて大中寺の本来の師に侍した。發悟させて、その法恩に報いたいと思つてその機会を待つていた。とある日、師のために入浴して背を洗い流しているとき、師の背を撫でながらいった、立派な仏殿ですが、仏様は聖ではございませんね。師はふと奇異な言葉を耳にしてうしろを振り返つて弟子を見た。弟子が云う、仏様は聖ではございませんが、まあ、光はよつだしておられる。師はひどくいぶかったが、たずねることができなかつた。

その後ある日のこと、窓の紙を張り替えた。日の光が窓を照らしてとても明るかった。師はその窓の下で看經していたが、数ひきの蠅がわがちにその窓に体当たりして出路をさがしていた。弟子は師のかたわらに立っていう、これほどの世界、あんなにも広大なところに出て行くことはせずに、故紙のうちに頭をうちつけて、そんなことでは何年たっても外には出ることはできませんまい。師はこの言葉を聞くと経巻を置いてたずねた、お前は行脚して来たが、どんな人に会って、どういふところをつかんだのか。先日來のお前の発言は、どうも通り一遍のことではない。お前ひとつくわしくわしに説いてみてくれ。弟子はそう問いかけられて、まさに本意になつたとばかりに、百丈大師からうけた禪門の心要を説いて云うには、靈妙な光はどこまでも耀きわたり、はるかに六根六塵を超脱している。まるごと眞実常住のところを露呈して、文字にもかかわらない。心の本性は汚染されることもなく、本とより完全無欠で、虚妄な因縁を離脱し切つてしまえば、如如仏本来あるがままの仏である。と。師は言下にあらゆるはらいが止息して、嘆じていった、不可思議なことだ。わしはもとも仏といふのは、ただ一人つきりとはかり思っていたが、今はじめて心の本源に立ちかえて明らかにしてみると、衆生は皆な仏であつたのだ。そこで皆なに告げていう、わしの弟子は行脚してすぐれた師の法を会得した。わしはその恩に答えようと思うが、諸君ひとつわしを手助けしてくれ。そこで人々は箆を備え法座を敷き了わると、弟子に請うて昇座して百丈大師の宗教を大略演べてもらった。人々はこれまでに聞いたこともない教えを聞いて皆ごとごとくよろこんだ。師は弟子に云う、わしはお前を剃髪させた師であるが、お前は今は、わしの本当の出世の師である。わしは今、お前に返礼して、この恩に答えるばかりだ。弟子は法座をおりて云う、これは世の中の礼節にそむきます。とてもできぬことです。師がもし出世の恩に答えたいとお思いでしたら、西方に向かつて遙かに百丈大師を礼拝して師となさして下さい。そうすれば道と同じに異つてはおりません。師はそこで弟子の申し出に従つて、遙かに百丈を礼拝して師とした。

・ 故紙 経巻をも指している。

弟子後に古靈山に住す、因りて古靈和尚と為す。徒を聚むること十数年間、遷化の時に臨み、剃髮洗浴し、香を焚き、鐘を聲して衆を集め告げて云く、汝等諸人還た無聲三昧を識^は得るや。衆曰く、識らず。請う師指示したまへ。師曰く、汝等靜思靜慮せよ。諦聽諦聽。師乃ち端坐して寂を告ぐ。

石霜性空和尚、百丈に嗣ぐ、吉州に在り。

僧問う、如何なるか是れ西来意。師曰く、如し人の百丈の井中に在りて、寸繩を假らずして此の人を出し得たれば、我は則ち為めに西来意を答えん。僧云く、与摩ならば則ち湖南に近日亦た暢和尚有つて、師僧の爲めに東話し西話す。師、沙弥を喚ぶらく、この死屍を拽き出し著せよ、と。

僧が問う、祖師が西からやつて来られた意図は何ですか。師が云う、もしお前さんが百丈もある井戸の中にいる人を縄切れもかずに救い出せたら、わしは西来意を答えてやるう。僧が云う、そんなことなら湖南にもこのころ暢和尚があられて、あれこれいつておられますよ。師は沙弥を喚んで云う、この死屍をひきずり出してしまえ。

・沙弥 「伝灯録九の双行注に「沙弥即仰山也」とある。因に仰山と同学の香巖智閑にも「香巖上樹」の則になっている「西来意」がある(無門関第五則)。

・暢和尚 伝不詳。

自外未だ終始を究めず。

祖堂集卷第十六